川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和卅五年五月廿日発行三十五年五月号
（毎月一回一日発行）創刊大正十三年・通巻三百九十六号

五月號

No. 396

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

新緑の宝塚に展く川柳大繪巻

1960年度
路郎賞決定！

川柳まつり

日　時　5月15日（日）午後1時

会　場　宝塚阪急旅行会館

（阪急宝塚駅下車・宝塚撮影所隣り
・宝塚市宮ノ下　電話宝塚四一二一番・）

優勝楯に挑む川柳コンクール

○

目に青葉、手に句箋。午前十時までにご出席の方には撮影所見学ご案内。温泉センターに少女歌劇や、日本の歴史博があり お家族づれでぜひどうぞ。

○

★柳話　司会　西尾栄
開会の辞　土井文蝶
挨拶　中島生々庵

★兼題　麻生路郎選
「温顔」（二句）
「洋酒」（三句）
「団体」（三句）
「おしゃべり」（三句）
「素っ破抜き」（三句）
「自信」（三句）

★席題　当日二題発表（各題三句）

★特別課題「学生」発表　麻生路郎選

★呈賞　★各題天地人・路郎選天位に不朽洞賞
★特別課題優勝者に路郎賞　★優勝者所属の会に天優勝楯を贈る。
（優勝楯は明年川柳まつり当日選選、川雑支部、準支部に属しない作家が優勝した場合は川雑本社の獲得となる）

★余興（当日のお楽しみ）
閉会の辞　有志諸家
川村好郎

★会費　百五十円（参加者全部におみやげ進呈）
会費三百五十円（同会場において5時半から7時まで）

★懇親宴

路郎選の入選発表は六月句会の会場でいたします。
〆切後の投句は無效となります。（句箋裏面雅号明記）

大阪市住吉区万代西5ノ25

川柳雑誌社

電話㊼6081番

6月本社句会

〃兼題〃
湯上り
女文字
口止め
裸一貫

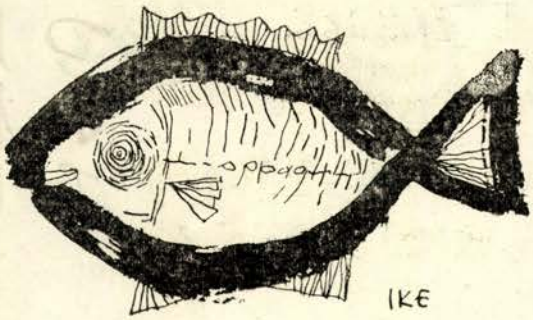
とき　6月7日
ところ　ナンバ未生会館

不朽洞句帖

麻生路郎

街のボスだが　妓にはたのもしく
女医と女医ジョッキへ誘う間柄
愛人はストのハチ巻してて会い
かくあれとのんびり寝てるウチの猫
なかなか死なない　しぶとさで老い
刑務所もうらら　囚人草むしり
生きるための　この水この水

前号正誤
脂ぎった政治家を憎むことの日日



川柳雑誌五月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎…(3)
川柳における「笑い」について……北川春巣…(4)
寿の字……浜田久米雄…(27)
ある座談会にて……堀口塊人…(16)
柳界の滓……直原七面山…(15)
柳論を吐く人達……高鷲亜鈍…(12)
川柳姉妹……一栄さんと清子さん……(30)
句評……前月号から……清水白柳…(14)
ホープの顔……酒井ひか平…(20)
可愛いい女……東野大八…(19)
深夜放送に聞く……木村十悟…(27)
絵と川柳で表現する歴史……戸田古方…(28)
療養雑筆……杉本一鶴…(22)
小式部内侍……冨士野鞍馬…(18)
辞書をもう一度……不二田一三夫…(28)
大万川柳九周年記念大会……(34)
川柳夫婦善哉……摩天郎・徳子……丸尾潮花…(26)
★雅号由来記……松川杜的…(33)　★川雑明和病院支部強し……(27)
★
川柳塔……麻生路郎選…(6)
同舟近詠……諸家…(30)
近作柳樽……麻生路郎選…(20)
金泥集……北川春巣選…(31)
各地柳壇……麻生葭乃選…(40)
入門講座（研究題・荷物）……清水白柳…(32)
柳界展望……(38)　★不朽洞会から……(39)
一路集「下手」……友淵貴山選…(36)
「少女」……弘津柳慶選…(37)
「ニコヨン」……吉田圭井堂選…(46)
ボクの水曜……路郎…(46)　ペンの散歩……(46)

題字……麻生路郎・表紙……戸田古方

川柳における「笑い」について

――「おかしみ」と「笑い」――

北川春巣

一

川柳の三要素ということがいつの頃から云われ、その一つに「おかしみ」が数えられている。そして近頃の川柳にはその「おかしみ」が少なくなって来ていると云われてもいる。

「おかしみ」とは漢字で「可笑味」と書き、一見「笑い」と関係あるような言葉であるが、その「笑い」と「おかしみ」について少しばかり考察してみたい。

「おかしい」は旧カナでは「をかし」と書き、平安時代からの文献に見えるそうで、その語源は「をこ」から出たものと推定せられている。「をこ」は漢字で袁許と書き、古事記に見えるそうである。大言海にも「おかし」は「をこ」（痴）から転じたものであるとし、「をこ」とは「あほうらしきこと。ばかげたること。おろか。ばか。たわけ」と出ている。

また「をこ」には「尾籠」という漢字を当て、これを音読みにして「ビロウ」とも読ませる。「ビロウ」は現在われわれが使っている「ビロウな話ですが」と前置きして、下がかった話をする、あのビロウである。

「をかし」は平安時代の流行語で、枕草子には盛んに使われ、恐らく当時の女房達の愛用語であったろうと思われている。これは若い女性の心持をよく示す語で、何かと云えばおかしがる年頃は現代と変りはなかったのである。

二

では「をかし」の語源「をこ」（ばかげたること）がどうして「笑い」と関係があるのであろうか、私は長い間疑問に思っていた。ところが最近、岩波新書の「笑いについて」（マルセル・パニョル著・鈴木力衛訳）を読んで、どうやらこの疑問が解けたように思うので、この本をテキストにして「川柳における笑い」について考えてみたいと思うのである。

パニョルによれば、「自然界には笑いの源泉はない。喜劇的なものの源泉は笑い手のなかにある。」のである。

「われわれは何を笑うか、の問題を解決するよりも、われわれは何故笑うか、の問題を解く方がはるかに大切である。」

著者のパニョルは有名なフランスの喜劇作者である。喜劇には舞台上の俳優と、それの見物人とがある。劇作者は人が何故笑うか、を研究して台本を作れば、見物人はいやでも笑わされるという寸法である。しかし喜劇には台詞のやりとりがあり、俳優の演技があるに反し、川柳には台詞もなければジェスチャーもない。僅か十七音字の中に、読者はその状景を頭に描き、頭の中でみずから台詞のやりとりをし、そこで笑いを催す、という違いがあるのである。

彼によれば、「笑いは勝利の歌である。それは笑い手の、笑われる人に対する瞬間的な、だが忽如として発見された優越感の表現である。」

ばかげたこと、おろかなこと（をこ）を忽如相手に発見した優越感が即ち「おかし」の感情であり、ここにおいて笑いが爆発する。「おかし」と「笑い」とが関係するのは、この点においてである。

時代がたつにつれ、おろかでなくても、軽い欠点のあるものを見て笑うことが「おかし」となり、更に笑いを催すようなものは何でも「おかし」と呼ぶようになったものと思われる。

三

パニョルによれば、「笑い」の定義は前記の通りであるが、笑いには二つの種類がある。二つは互いに遠く相隔っているが、同時に地球の両極のように完全な連帯性をもっている。

「㋑第一の笑いは、真の笑いであり、健康な強壮な、人の心を落ちつける笑いである。私は自分がお前より（―あるいは彼より、あるいは全世界より、あるいは私自身より）優越しているが故に笑う。このような笑いを「積極的な笑い」と呼ぶことができる。」

「㋺第二の笑いは、固い、悲しいと云ってもいいような笑いである。私はお前が私より劣っているが故に笑う。私は自分の優越性を笑うのでなく、お前の劣等性を笑うのだ。これは「消極的な笑い」であり、軽蔑の笑いである。復讐の笑いである。」

徳川時代、借金の証書には「若し約束通り返金のできぬ場合には、人前で笑ってもらっても苦しくない。」と書いた由であるが、この「笑い」がここに記した㋺の笑いである。武士は人前で侮辱を受けることを死よりも苦痛とした。

「㋩以上二種類の笑いの間に、ありとあらゆるニュアンスが存在する。」

四

文明人の間では、生理作用が「笑い」を生むことは万人の認めるところである。とパニョルは云う。ここでは「ビロウ」の「をこ」が現われるのである。

「この領域ではわれわれはすべて平等であり、またその平等たることをよく知っている。しゃっくりをする紳士、「糞づまり」になったアラビヤ人等は、舞台の上では観客を笑わせるに充分である。」

また生理作用の一つである性的な面では、古川柳における「末摘花」がこの領域の「笑い」を提供している。しかしながら、川柳に「笑い」が必要だとはいっても現代において「現代版末摘花」を作句発表する作家はあるまい。

なお、生理作用は未開人を笑わせないことをもパニョルは指摘している。未開人の間では、それは公然と、極めて自然に行われているから、人前でそのような欲望を満たす男は、劣等感を抱かないからである。と説明している。「おどけたこと」をまた「滑稽」というが、この滑稽という言葉も「おかしみ」と同じ意味に使われている。バルザックの「風流滑稽譚」においては、主として生理作用の「滑稽」を書いてある

ことは周知の通りである。

五

笑いのもう一つの原因、それは社会的な身分の相違である、とパニョルは続けて書き、将軍や司教や市長などの身にふりかかった不慮の災難は、浮浪者のそれよりも喜劇的である、と指摘している。

「ある大統領が夜汽車から落ちた事件は、フランス全土を馬鹿笑いに包んでしまった。勿論彼に敵意があったからではない。しかし、一瞬間でも他人に対して優越感を抱くのは、人々にとって何と喜びであろう。しかもその人が大統領であればなおさらのことである。退職した郵便配達夫が同じ災難に遭ったとしたら、誰の目にも滑稽には写らなかったであろう。」

かつて麻生磯次氏が「川柳の暴露的な笑」と題して、「国文学解釈と鑑賞」（川柳特集号―昭和三十年十月）に発表されたものなどはこれに当ると思われる。麻生氏は、当時の川柳人が、武士、学者、医者、僧侶など上流階級の人々の仮面をはいで、その瞬間的な優越感を味わい、そこに「笑い」が生じるのであると、説かれている。そして

大名の過去は野に伏し山に伏し
緋の衣着れば浮世が惜しくなり
仲人にかけては至極名医なり
先生へいかがと問えばそんなもの

等々の句を例に挙げて、句意を説明しておられる。

六

次に来るのは知的な相違である。とパニョルは云う。

「小学生が字を間違えても誰も笑わない。われわれはその少年に対する知的優越を人前で証明する必要を感じないからである。だが教師が字を間違えたら生徒が笑う。生徒は一瞬知的優越を感じるのだ。」

川柳においても、社会的経験の少なかった時には滑稽に思われた句が、社会的経験を積んだ後ではおかしくも何ともない、と思うようになる。

古川柳には、下女や居候などが笑いの種になっているが、われわれは下女や居候よりも優越していることを他に証明する必要はないので、こんな句ではもう笑わないのである。

「葬式は極めて陽気なものだ。すべての人が死者に対して優越感を抱くからだ。」とパニョルは云っている。「笑わないのは、死人と、自分自身のために恐怖を感じる人々だけだ。」

私はここで豆秋氏の句

葬式で合いぼろいことおまへんか

を思い出した。「厳粛であるべき筈の葬式の場においてこんな会話をするとは……」と路郎先生と同じように私は思っていたのだが、パニョルのこの説明を読めば、葬式は陽気なものであり得る筈で、このような話が出るのももっともだと思われて、この句を見直した次第である。

「洒落・語呂合せ・掛け言葉なども知的な笑いである。酒に酔っぱらった一段階において、盛んに駄洒落や語呂合せなどを連発する時期がある。

「どうだい、だいこん野郎め！」

「じゃお前さんは、さんすけやっこめ！」

頭脳が言葉を支配するのでなく、酔っぱらいの耳に聞こえるのは、単なる音に過ぎない。聞き手はこれに対して優越感を抱く。もっとも話し手も進んで笑われ役を買って出たのであり、自分らの演じた役を自分らで笑うのである。」

古川柳においても洒落や語呂合せ、掛け言葉などいわゆる語戯といわれる句は枚挙にいとまがない。しかしこれらの句は余りにも知識の遊戯に過ぎて、後には狂句と呼ばれるようになり、狂句は現代川柳においては、もはや相手にされなくなってしまった。

七

消極的な笑いは、「私は私の優越性を笑うのではなく、お前の劣等性を笑う。」という笑いである。パニョルは云う

「バナナの皮に足をすべらせた男を見て、私は―遠くから―積極的な笑いを笑った。近づいてみると、それは私の仇敵である。私は消極的な笑いを笑う。私は転んだのがその男であるが故に笑うのだ。私は私のために笑うのでなく、その男をやっつけて笑う。」

友人と一しょに散歩していた時、人が転んだのを見た。その友人が「あれは川柳になりませんか？」と云ったので腹が立った。彼は川柳を誤解しているのだ。――と岸本水府氏だったかが書いておられるのを読んだことがあるが、確かにこの場合の笑いは、川柳の笑いの領分ではないようだ。

川柳の初心者は、このような笑い―消極的な―を作句することが多いので、失敗するのではあるまいか。

新聞の政治漫画、あれなどは政界のおえら方の弱点とか失敗とかをよく描き出してある。身分の低い人たちを引き合いに出すことは絶対にない。この世の幸福な人々を読者の前で劣等状態におとしいれ、読者はそれでご満悦という寸法である。この種の笑いは、積極的な笑いではなくて、むしろ報復的な性格を帯びている。

この種漫画を川柳にすれば、世に受けること受け合いだと思うのだが、多くの川柳作家は手をつけようとしない。彼らはこの種の笑いが川柳にはむかないことを知っているからとも云えよう。

八

私は本稿において「おかしみ」と「笑い」の関係を考察し、ついで「笑い」には二種類―積極的な笑いと消極的な笑いとが―あることを、パニョルの著書から紹介した。そして消極的な笑いは川柳にはむかないことをも見た。われわれが川柳に望むのは積極的な笑いである。積極的な笑いは健康であり、川柳はそこに向って進まねばならない。

しかしながら現代川柳には笑いの要素が次第に少なくなっている。これは誰でもが認めている事実であるが、パニョルは「笑い」について最後にその測定法を次のように書いている。

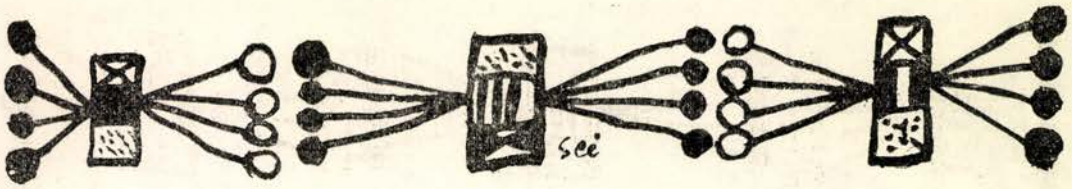
「同じ喜劇的な事物を、何故われわれ全部が笑わないか。

人間的な価値の段階が一から百まであるとして、私が六十一という価値を自分に与えたと仮定する。

二十七や三十四の価値の人間が不幸な目に遭っても、私は笑う気になれないであろう。私は彼らに対して自分の優越性を証明する必要を感じない。

反対に十二乃至十四の価値の連中は、三十一の人間が失敗したりヘマをしたりすると大喜びするだろうし、四十二の人間が大失態を演じると、この上もない快感を味わう。だが六十一のこの私にとって、そんなことは面白くもおかしくもない。」

この測定法はなかなか面白い。肯づけるものをもっているようだ。この議論でいけば、川柳に笑いが少なくなったということは、読者の人間的価値が次第に高くなってきたことを示すのではあるまいか。また作家の方もミーちゃんハーちゃんを笑わすような句は作りたくない、というわけで作家の方の価値も上って来ているのである。笑いの川柳が少なくなったことは淋しくもあるが、また喜ぶべき現象だとも云えると思うのである。



川柳塔

豊中市　戸田古方

悲劇への甘い涙がおそろしく
ひとり子のいよいよひとりでいたく
ショウウインドウのスケッチをして気がひける

大阪市　市場没食子

入試の子だけ一時聞き二時を聞き
ひと様にかられるばかりモーニング
奥さんの死ぬのを待って二号老け

西宮市　若本多久志

モーニング今日は葬式二つあり
四十女初めて春を知る化粧
何くそと白衣の前を通り過ぎ

京都にて

にしんそば茲京極の街はずれ

大阪市　正本水客

終電で帰って茶漬け食べておく
マスク外して毒舌を新たにし
花売りをしていた娘とは気がつかず

大阪市　丸尾潮花

念押して大金腹へ巻いてやり
気がつけば肚に力が抜けていた
ザイラブーム神鍋で足を折り

大阪市　西いわを

強盗犯初めての特急二
北浜で金を失くして来たと云う

大阪市　武部香林

離阪

大阪の人の渦から二人減り
唯物論黒だ黒だと突きかかり

ハワイ　古川魔花麗

血統ばかり言うて娘をまた泣かせ
人同じからず社宅の窓あかり
せびるだけせびれば用の無いお方

ハワイ　築山快夢起

二月八日入院病中作

看護婦がどれも美人に見える朝
看護婦に叱られる朝もてる朝
学校をサボリ橋蔵後援会

ホノルル市　白砂旋風

戦争の話し念仏して終り
秋の風に木の葉のように落選し

大阪市　須崎豆秋

原水爆実験で地球が死滅するという
映画「渚にて」を観て（三句）

目前の死へ灼けつくような恋
サンフランシスコ動くもの一つ無く
紙屑が飛んでる死滅をした地球

兵庫県　小西無鬼

不自然の黒さ気になる白髪染
見栄を張る同士の話題派手になり
世に馴れて善意の嘘に眼をつむり

奈良県　尾崎方正

極東は地図にあるよとなぜ云えぬ
新婚の苦情先輩笑うだけ

堺市　吉田圭井堂

両親が若く長男しんどがり
ヒスあやす修業も積んで共白髪
たまさかに誘えば妻は髪のこと

山口県　国弘半休

露出した山の起伏にある魅力
くぐり戸を押せば二階の台所
年寄を年寄言うて叱られる

防府市　長野井蛙

市場籠ひと廻りせねば気がすまず
インタビュー相手の都合気にとめず
アンテナの谷間が子供を卑屈にし
未亡人こんな些細な智慧も借り
一家心中よそに金庫で丸昼寝

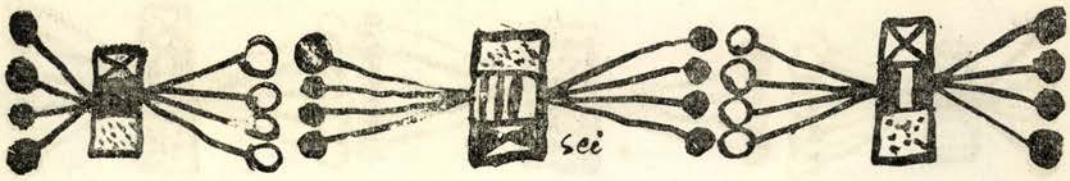
大阪市　太田良子

髪染めて見たんやけどと妻若し
無視されて淋しく映画見て帰り

岡山県　直原七面山

せかせかと暮しせかせか逝った父
青春朽ち果てて無罪判決
女の方も結婚にはふれず

ホノルル市　羽佐間柳葉



試験的結婚ですのと悪びれず
鳥取市　河村日満

日の御子へママの乳なる育児法
応援歌たたき込まれた頃おもう
入試詐欺そのアイデァもない俺か
豊中市　足立春雄

受け売りの講義で飯も食えており
評論家一つお前がやってみな
倉敷市　木村千容

長孫急逝飛電
奇蹟あるのみとは医者も率直な
われと吾が心身にあるズレを識る

教育長より歌集輪廻拝領
歌集輪廻その人柄がうなずかれ
倉敷市　田垣方大

こんなにも蜘蛛の巣がある霧の朝
課長になったら面白い会社
スクーターで来る社長なり町工場
飲むだしになるとは知らぬ藤の花
祭日に猿を見に行くプランなり
加賀市　野村味平

数え歌唄えば女やめといて
春の宵ひょいと浮気がして見たく
気短かな社長の朝が恐がられ
大阪市　木村水堂

催促の大阪弁はよくこたえ
肩書がなくて云いたい事が云え

香林若菜御夫妻

近松の筆になるよな夫婦愛
高槻市　福田丁路

北摂一庫温泉にて
温泉が溢れ生気が溢れ春近し
がめつい奴の美事な金使い
熱狂に応え血を見るレスリング
急転直下離婚しましょうそうしよう
大阪市　真鍋一瓢

後で来た医者臨終を云う不幸
一犬吼えてＰＴＡの寄附が来る
大阪市　後藤梅志

ひょこひょこと出るから弟子に見つけられ
学問のない悲しさを道に捨て
インタビューついに相手を泣かす迄
米子市　小西雄々

割勘で紅一点の分も出し
声帯をいためたままで車中談
駅前で買うことにした旅かばん
服装をＢＧ毎日かえて出る
大阪市　山川阿茶

上方ブーム銀座でバッテラ雀ずし
むかむかと税務署を出て輦かれかけ
鼻毛まで白髪になって淋しけれ
大阪市　金井文秋

参観日来るなと自信ない子供
自家用を見せて女の弱さつき
予備校にまた予備校がいりそうな
加賀市　那谷光郎

釣銭は妻へそくりにしてるらし
社宅中出会えと豆腐屋のラッパ
大げさに病状を言うて凡医なり
大阪市　北川春巣

アベックで行けと散歩を子がすすめ
町内でテレビない家子が数え
今度の風邪は長いですよと医者も咳き
おにぎり屋ガールフレンドにリードされ
作業服顔の汚れぬのが主任
岡山市　浜田久米雄

火葬場の煙が横に這って春
下駄で出ることにきめとく春の宵
春に居るこころ歯磨粉を散らし
出雲市　尼　緑之助

似た者の夫婦となっている家風

初孫
おじいちゃんそう悪い言葉でもなし

老父病む
九十二古木のごとく床につき
突く真似もして高校生ドスを研ぎ
大阪市　水谷竹荘

遊び好き我流で踊り考える
銀婚が過ぎているのにまだ妬く気
柳井市　弘津柳慶

麻雀を知らぬ社員を煙たがり
仏壇へヘソクリ預ける不届さ
友情のまんまきれいに別れて来
鳥取市　杉谷湖山

大阪大阪って迷路の様な奥に居て
京都市　大鶴喜由

とりどりのおぐし千日かずらも居
浩宮御誕生

君が代の幾久しくも王子さま
尼崎市　小林文月

伝言板用を足さずに消されたり
靴磨き柱の陰に半分見え
ターミナルあの柱にも人が待ち
春が来て財の乏しき事を知り
大阪市　飯降白香

法善寺郷愁が湧く石だたみ
金婚というに五十の老嬢(むすめ)もち
ランデビュー握った手から霧が晴れ
代筆へ本心ふっとでてしまい
うれしさは口笛吹かせて出るホテル
呉市　林野甦光

春らんまんスリも多忙な日を稼ぎ
お袋の入歯へもなかへばり付き
落書へしばし先生も見とれたり
ニコヨンの夫婦は籍を別に持ち
大阪府　阿万万的

早春の墨絵の中を汽車走る
競輪のピラにも春夏秋の色
B・Gの髪もそれぞれ春の型
中学一年此頃父を批判する
岡山県　福島鉄児

一杯の酒顔だけが温まり
肥車観光バスへたじろがず
釣書のここにも見栄の字が並び
釣書へまさか小卒とも書けず
岡山市　服部十九平

すべり台独りに慣れた混血児
独乙語を混えて教授の独り言
尼崎市　長谷川三司

げんまんに六十の掌とはたちの手
ウィスキーなら飲むッと妓は派手に
孫と来てよかった孔雀尾を拡げ
痛む腰撫てヤイトの礼も言い
兵庫県　若林草右

名門は読めない軸を売りに出し
人間国宝生きていますとテレビ見せ
熊本市　有働菜春

東京は夢の育たぬとこと知り
入試前親の必死の瞳に坐り
抱き方の下手をベビーに怒られる
大阪市　山本葉光

やり繰りを羨やませてる自家用車
思い出し笑い少女の健やかさ
岡山県　田村藤波

信用をされて職人手を抜けず
道楽をしたとは見せぬ父の顔
妻に頭あがらぬ約束して戻り
岡山県　岡田夜潮

こめかみが動いてそばに寄りつけず
児島市　本田恵二朗

道問えば方言微に入り細に入り
ポヤほどの恋春風に燃えあがり
京都市　松川杜的

鳩のなく声を聞いてる懐手
オルゴール安来節は無いかとお上りさん
労組費払ろてた時代をなつかしみ
二階からもうアンテナの数勘定せず
鳥取市　森本法泉子

還暦を年の内からふれ廻り
摸擬試験母に門まで送られて
松原市　小池しげお

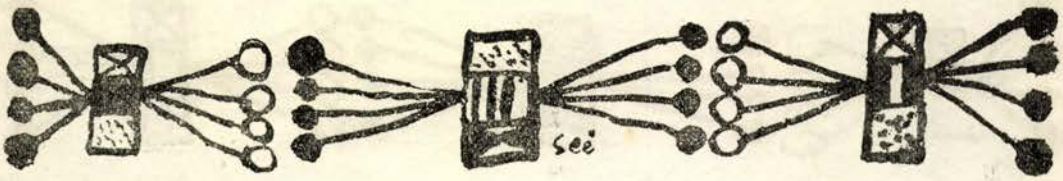
玄関をほっちらかして手内職
重患もええ看護婦を知っており
洋酒でもやっぱり安来節になり
独り者らしくボタンがとれている
倉敷市　松村万古

通信簿親は昔を棚に上げ
御焼香煙へ恩を謝し切れず
御近所のあやかり組がまだ産めず
岡山市　津田麦太楼

気味のよい噂さ税吏の数珠つなぎ
卵巣を取った女のふてくされ
孫よりも猫が可愛い御寮はん
伍健逝き伊予の狸も淋しかろ
吹田市　橋本幸男

長男誕生

生え際のくせ毛も似てる子が生れ
堺市　高崎雄声



校名も判らぬ看板誇にし
美人からうつる欠伸のおかしゅうて
のび放題の爪は野獣のように見え
島根県　藤井明朗

かくし芸三味の調子がととのわず
集金旅行女将はそれとにらんで来
ゴム靴を女がはけば世帯じみ
岡山県　永松東岸

家裁から肩を並べて帰るなり
ピクともしない男のそんなとこを好き
倉敷市　野田素身郎

無精髭撫でて無策の日曜日
失恋ぐらいでは食欲がなくならず
お隣りもテレビ料理の匂がし
大阪市　清水望峰

女医さんの主人は何をする人ぞ
看護婦の免証があって妻強し
大阪市　伊達堰子

大阪の煙も入れてバスガイド
あんな孫もう有る筈の引導鐘
大阪市　不二田一三夫

実の子を姉とよばせて生きる身の
宴会用に小唄など習いだし
兵庫県　酒井ひか平

草餅は立杭焼に入れて出し
捨てられてからも玉葱新芽出し
日曜のよさはきせるで喫い付ける
血圧を忘れてカッとしてしまい
大阪府　深見雅堂

屋根裏に住んでる方が家主だす
お迎えが来たらしいとは母の風邪
昼の酒盆栽に触れ年に触れ
宇部市　津秋六花

格式がどうのと生木をひきさく気
神戸市　丸川初甫

土砂降りへ駅たしかめる車窓を拭き
見送りはハナの雫へ握手する
岡山県　池田古心

年金へ近い齢かとは失敬な
所得税扶養家族が欲しくなり
東京都　石居高志

工員払底（三句）

職安に背を向けられた街工場
口惜しさはたかが中卒来てくれず
みっちりと仕込んだ腕を引き抜かれ
大阪府　早川清生

京の夜を団体パチンコ屋ですごし
死で詫びる恋路女の年が上
不身持のもとは亡夫の愛しすぎ
堺市　辻圭水

流感は貧乏人にも遠慮せず
さすが妻何かあったと感じとり
岡山県　野々口美舟

もう再起出来ぬと風邪の床に伏す
春霞どころかせわし針の先
西宮市　小浜牧人

遊ばせて未だ官立をあきらめず
華やかに劇場借りてヤクザの死
豊中市　菱田満秋

刑務所でチボは小器用さをかわれ
春の服着て寒かりし戎橋
金のある間はほんとに好きだった
兵庫県　前川左文字

六〇年の春は天皇一家から

島津貴子さんを祝して

しあわせはスイートホームに灯がともる
死火山じゃなかったこの頃紅を引き
冷蔵庫写真のように入っとらず
大阪市　橘高薫風子

髪ふり乱す女に似たり海の荒れ
引金を引く一瞬が恋にあり
喪服着た妻に女が残ってた
大阪市　桝本蕗児

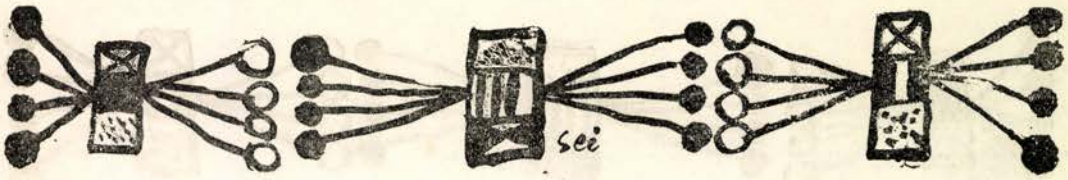
幸男氏二世誕生

頼りない親父やないかとひやかされ
仰げば尊とし先生なぐられる
大阪市　西川晃

火を借るにおいおっさんとぬかしたり
敬虔にして傲然と神を説く

釜ヶ崎風景

もう落ちるとこなし此処は釜ヶ崎
病床の白さがたまらなく淋し
冬物をもう質に置く梅が咲き
鳥取県　田中蛙眠子



雨の湖新婚夫婦をくつろがせ
名古屋市　野田一念

宴会が専務の仕事とは哀れ
お見合はスリルがあってイカスわね
拝啓陳者金を借してんか
失恋でお洒落するのがはたとやみ
岡山市　林　葉丘

置物の様に芸者が坐らされ
定年へ時計の如き君なりき
火葬場の煙を北風吹き千切り
秋刀魚焼く煙から顔を出してよび
神戸市　仲　どんたく

イメージをこわす男の靴の音
マダムのパチンコに飽き風呂に飽き
平田市　久家代仕男

春場所は見たし試験はパスしたし
急進派鳴りをひそめて異動待つ
云うなれば高野豆腐に似た君よ
大阪市　本多柳志

窓口は人より判コ重視され
ボーフラの博士と知らず診て貰い
出雲市　原　独仙

押しのけて乗る程急ぐ用でなし
学成りて職なき渦へ投げ出され
器量よし声よしガイド背が低し
花見とは砂塵を浴びるものと知り
大阪市　大谷月都

土俵掃くにも三年という世界
クルーソーのような生活もしてみたし
岡山市　江国幽谷

御近所が退職金を計算し
若い気の妻が帽子をきせたがり
三分ほど足らない下女でよく動き
下女の部屋から目さましが鳴っており
玄関であっさり下女にことわられ
岡山市　光好陽子

秒針が楽しい春をつれて来る
安保反対足引きずって行進し
先妻の子へ下女だけが味方をし
尼崎市　徳永鬼美

定年へ元気いささかもてあまし
西宮市　野呂鵜汀

最後には女は金になる体
年頃へ差出人の無い手紙
西宮市　樋口舟遊

頭文字二つに切った製材機
二番目に好きな女と持つ世帯
新潟県　高野むじな

好き好き好きと歌にかこつけはばからず
斗争委員に選ばれるのもお人柄
ことわざ辞典明治生まれの趣味にされ
借り倒したのがぬけぬけと賀状呉れ
高砂市　吉原紅月

祭りかと思えばやくざの葬式か
酔覚ます夜道へ梅が匂うて来
大臣に負けない程のホラを吹き
大阪市　欄蘭

折空(ぎりぎり)も嫁は大事に仕舞うなり
網持ってすくいに行こかながい風呂
大阪市　石倉旅風

憲法の嘘を子供に教えられ
人間の顔よりマネキン活きて見え
新宮さまご誕生

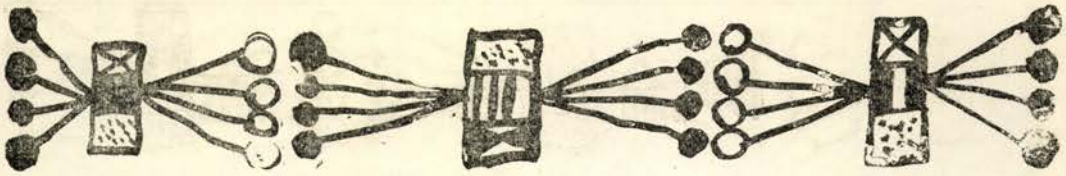
皇孫が生まれ盃持ち直し
煙吐く汽車なつかしい駅を発つ
朝風呂の客だしぬけに話しかけ
その気ならこっちも嘘でやり返し
政治家がいちばん悪い世となりぬ
大阪市　魚住満潮

続西成界わい（五句）

ドサ廻り朝からの雨まだ止まず
二十才まで女でいたと言う男
酒と女このチンピラがもう覚え
殺し屋の手記お母さんお母さん
春陽燦々キン玉出して寝てる人
大阪府　林　昌男

妻の客株上ったの下ったの
よれよれになって履歴書戻って来
お化粧を落せば母の顔になり
愛媛県　村上旭童

ハンストを家でやる気の妻になり
売声を止めて魚屋小便し
トラックが又ゆすぶっていく新居
倉吉市　大前鳴光



おっとりとしてて女に手が早く
煙を吐く汽車は子供に手を振られ
鳥取市　北　村　三　歩

遮断機をくぐりたいほど急いどり
言うなればストーブ焚いている勤め
神戸市　傍　島　静　馬

二男から下はそこそこファイト持ち
冷蔵機カタログだけは揃えたり
人妻に納まり芸妓けちになり
笠岡市　木　山　遠　二

することがまだまだあってぼけられず
春惜みつつ豚の世話牛の世話
輪になって草に座ってたのしそう
大阪市　村　山　光　輪

風邪の子へ見舞は玄関先で去に
流感が結婚式を延ばさせる
社長留守流感と云う隠れ箕
布施市　森　下　愛　論

妻にない魅力求めて街へ出る
岡山市　宗　高　矢　寸　志

飲み過ぎた養子調子に乗り過ぎる
スリルの毎日家賃米代給食費
大阪市　河　井　庸　佑

借りたさに悪口じっと聞いており
事故現場飛んだ下駄へ丸を書き
大阪市　小　島　さぎす

トラックにお通りねごうてふむペタル
電話します電話があてにならぬひと
大阪府　谷　沢　好　祐

他人(ひと)のアラ喋って食える解説者
お向いもするからやります手内職
母が去に揉んでた妻の肩をもみ
泉大津市　高　津　徹　也

裏門のない国立という魅力
捕まれば面(つら)写させぬ恥は持ち
愛媛県　槇　柴　光

日に二三度磨けと云わぬサンスター
善いことをしても善人てれくさい
カナリヤの声さへ腹の立つ日なり
引ったくるようなキッスをするヤクザ
青森市　工　藤　甲　吉

新宮と一緒に産まれ貧し過ぎ
表札を見て困るのが訪ねて来
雪消えて隣りの声が近くなり
西宮市　門　永　三　舟

そう云えばえくぼのあった顔なりし
喜劇終え帰った父の顔渋し
飲んだことふせて勘定合わぬ顔
玉野市　伊　原　明　林

手の甲で欠伸をたたく女秘書
フイルムの残りで常着写される
大阪市　藤　村　梨　花

草萌える春の希望はねたいだけ
卒業式

師の恩へそれでもちょっと泣いて見せ
美しさ故に憎悪の渦に生き
松江市　小　林　孤　呂　二

春の陽へかけ軸だけが雪景色
幼稚園何処にいるやら見あたらず
大学に通いバーのマッチが増えるなり
松江市　舟　木　与　根　一

小父さまと呼ばれ警戒されてない
全集を飾っただけの知識です
神戸市　室　田　千　尋

捨てられたけれども憎んでは居らず
かんでふくめる様に言うのが気に入らず
まずしさに長く忘れていた怒り
豊中市　林　夢　虹

見えぬ眼の黒い眼鏡を恐がられ
父親を人間として見る男の子
初恋の男を娼婦まだ信じ
堺市　吉　本　菁　風

年老いて男こせこせ云い始め
武者小路すきと汚れのない瞳
西宮市　山　本　一　傘

死に顔のきれいなことも愚痴になり
町で見ただけのふたりを恋にする
低いのにしとけと妻のハイヒール
葬式に行って隠居をすすめられ
女房云うわたしの勘はよくあたる
金貸した方からこんどは出掛けて来
堺市　杉　前　南　宗

チャンネルを勝手に替える近所の子
また元のおけらになって舞い戻り

柳論を吐く人達

——但し僕の知る小範囲に限って——

高鷲亞鈍

最近、句評が各柳誌で活潑に取上げられるようになってきたことは喜ばしい。我らの誌上でも、「句評リレー」や、「座談会」が掲載されて、一応現代川柳界の諸問題を衝く真摯な討論も行われてきた。

僕の属する支部句会では、兼題、席題の作句時間を短くして、その時折りの句評に十時十一時頃まで激論を斗わすことも珍しくはない。機械的に作句ばかり専心するより、たまに句を検討しあい、議論を吐きあうことは、つぎの作句にどれだけ役たつものであるか、その雰囲気に浸って聴いたり読んだりするだけでも、新人はいちはやく技術を習得し、ベテランはマンネリズムを打破ることが出来る。

しかし議論が議論倒れになり、理屈のための理屈に陥らぬよう、互いに誡めねばならないことは勿論で、万一作家が理論に拘泥しすぎるようになると肝心の作句ができなくなるから、これは注意すべきことである。

某誌に現代川柳壇の精鋭である大山竹二氏（ふあうすと）小宮山雅壹氏（しなの）堀豊次氏（天馬）の三氏合評による句評が昨年四カ月に亙り連載されたのを読んだが、句評としては最近出色なもので、それぞれ所属柳誌の主張を枉げず、掲載誌と句主にオベッカがなく、さりとて変にヒネくったいや味も無く、読んで快適、爽快味さえ感じられた。

しかし、それ等三氏の俎上にのぼった数十句が、句主に対する正当な評価が下されてあったかどうかは疑わしい。

この句評方法は、誌上座談会の形式をとっているが、それは我社の句評リレー式方法であって、予め文通によるバトン式持ち廻りは、最初トップを受けもつ評者の句評が、次ぎ次ぎの句評の先入観になってしまっていること。中にはその先入観を打消そうと故意に反対のための反対を敢えてしたり、或は呆気なく同調したりしているようで、何かしら物足らないものがあった。これはうちの句評リレーの場合だって云えるが、それでは句主たる作家に忠実な批評とは云い難いのではなかろうか。

句主名を伏せて現代川柳を批評することの許されない昨今、作者の意図とか思感を抜きにした批評は成立しないと考えられる。

今一つ句評ブームの特色として挙げられる点は、批評家の殆どが即作家であること、しかも近代文学を教養につけた若い作家であるということは意義あることで明るい前途が約束されて愉しい。ひところ川柳といえば古川柳がどうの、江戸時代の風俗がどうのと好尚的なことを取上げたり、落語家や講談師の口述を有難がったり、歌舞伎、能、文楽、浄瑠璃などの日本の無形文化財と比較して、その共通と相違点を漫談するのが川柳の批評と見做されていたらしいが、昨今はそうでなく、現代詩論を引用し、韻律、内在律、美意識、ポエジー、文学、芸術、詩、非詩、浪漫、現実、写実、象徴、抽象、具象、観念的、具体的、主観、客観から、レトリックに於ける比喩、直喩、暗喩の修辞法にわが誌上では素材、心理、等々の理論上の専用語が数多く駆使され、いわば西欧精神—と云うだけで心中に丁髷を結ぶ連中は耳を閉ぐだろうが—から伝来した翻訳語で批評されてあることだ。

川柳を現在もなお日本の無形文化財として、一極小グルウプと碧眼の観光客（フジヤマ。ゲイシャ・ガール階級）の鑑賞対象になっている文楽とか歌舞伎と同様に観てしまうなら、いざ知らず、現代に生活する庶民と血肉を分つものとして現代川柳を捉えるなら、世界にある日本を、世界人としての日本人を、世界精神（世界観）としての日本精神（日本観）を、世界文化としての日本文化を再確認しなければならない。

さすれば現代川柳が、チャチな短歌や俳句と共通の広場を漁るばかりでなく、世界精神を基盤にもつ明治中期に発生した新体詩（精しくは「月へゆく道」参照）の流れを汲む現代詩観から、一九六〇年に生きる庶民のもつ川柳を論することは妥当である。

僕の「詩川柳」論は決して六カしいことはない。少くとも読者諸兄姉が一発嚔をした途端に近所の薬局へ走り、アスピリン錠を買ってきて、その効能書の薄片を読んでみ給え。その方がよっぽど六カしい。

ああそれなのに僕の書くものが六カしいとよく周囲から云われると、そのたびに自分の文筆に自信がもてなくなり憮然とする。がその反面、何故六カしいか、と反問したくなってくる。すると、実は彼らは喰わずぎらいで頭から読んでいないことが分ったのである。もっともな話で、僕は税務署から配布される所得税の申告用紙の説明書は頭から受けつけないし、六法全書や、法律に関する書物の頁を繰って見たとたんに頭の廻転が止ってしまうようなものだ。

けれども申告〆切日が迫り、やんごとなき必要な場面に立ち到った時は、兎にも角にも繰り返しひっくり返して読まざるを得ず、読めば、何とか分るものである。

僕の詩川柳も一応は読んで欲しい。読めば判るようになっている筈である。しかし読んでも判らないとすれば、僕は批評家としても零だ。それは僕だけに限ったことではない。誰でも、読んで解らないものは論文でも、随筆でも、小説でもそれは、絶対に致命的なものとして非は筆者の側にあるといってよい。しかし詩川柳を税務署の申告用紙のように毛嫌いしてかかる人達まで僕の責任にされるのは迷惑である。

それは他の柳誌で往往にして読むが、昨今の句評とか批評が僕でも非常に六カしく思われてきた。「天馬」の山村祐氏、「し

なの」の橘祐氏。「せんば」の岩本具里院氏などの論客達の書くものがそれである。彼らはそれぞれの立場から現代詩観乃至は世界詩観的見地から現代川柳を考察しようとしている。その中で具里院氏は一人、川柳のもつ五七五定型律格に固執して、川柳は詩である。—実は形式の詩—とし、近代詩観に反対の立場をとっている。これに対する前衛派を謳る山村祐氏との論戦は華々しかったが、祐氏には現代詩観に筋を通しているだけあって一日の長があり、軍配はどちらかと云えば祐氏に上る。「しなの」だけに時たま柳誌月評をなす橘祐氏とは、或は山村祐氏の変名ではないかと、感じさすほど現代詩に通暁している如くに見受けられるが、ここでは明確な己が主張を押出さず、各柳誌、各作家の立場とか主張を理解し、凡てを呑み込んだ上でのその月々の柳界の動向や問題を正当に評価する見事な月評ぶりであった。

論客というよりは作家に比重がかかりながら黙って居れない一言居士（実は作家は一にも二にも沈黙を固執する方が好ましい。）のうち比較的物分りのよいのでは、伊良子擁一、柴田午朗、布部幸男、伊藤拍車、に前記の竹二、雅登、豊次の諸氏ぐらい。物分りの悪い柳人の筆頭に石原青竜刀（作家よりも論客の部類に入るかも知れない。）堀口塊人、岡橋宣介、河野春三、石曽根民郎、その他数えあげるとキリがない。—但し物分りの悪いということで、石原青竜刀氏を除く他氏に対しては、いささか失言であった。塊人以下、第一級の川柳作家は、作家の通有性とする理論構成のヘタクソから、行き当りばったりの思いつきで、極めて常識的、平凡、月並み—に述べることが多く、ときに彼ら先輩が若い者に負けないつもりの言い草がスカタンになったりする点を僕は指摘したいのである。

別に古川柳研究として知られている山路閑古、大村沙華、冨士野鞍馬の諸氏など、現役に伍して柳論を吐く場合があるが、何としてもズレが目立つのは世代の相違故致し方なく、彼らは一途に古句研究を発表して、後世に残す仕事の側に廻って貰う方が有難い。その方が現柳界をヤヤこしくしなくてスッキリできるというものだ。

さて柳界の何巨頭か知らないが、我らの師、麻生路郎に岸本水府氏、椙元紋太氏の関西に比し、今は前田雀郎の物故のため、関東では現役第一線に立つは川上三太郎氏只一人になったのを加えた大家の一家言を検討するに、三太郎氏の「川柳研究」の巻頭言は、川柳家のわりに乙に済まし、禅坊主のように悟ったような物言いは案外見せかけのように思えてならず、今は仔細に吟味検討をするわけにいかぬが、一種のスタイリストとして吾々若い者には屁のつっぱりにもならない。

神戸のモラリスト椙元紋太氏の「茶の間」談義は相当に実のあるものであった。川柳は人間であり、人間は川柳であるなどと、理論的には随分無暴な言い方であるが、しかしこの人にして初めて云える言葉であるかも知れない。この大家は確かに川柳を丸ごと身につけ、そこを正直に誰憚かることなく書いたり、云ったりするので、紋太氏に誰でも親近感をもつ。そして吾がことのように紋太氏とその誌「ふあうすと」の世話を焼く者が絶えないのである。

しかしこの種の自らの経験とか体験を通してのみが人生観の全部であると考える真念には箸にも棒にもかからぬ一徹な頑固さで、年老くにしたがいいっそう拍車がかかる。

全国的に—海外まで—多数の読者を持ち、従って発行部数で一、二を争う柳誌は、わが「川柳雑誌」と「番傘」であろう。その主宰者、麻生路郎師と岸本水府氏こそは名実共に兼備した両巨頭と云って過言ではない。秀吉と家康。升田九段と大山名人の如く、僕は何故かこの二人を柳界の両巨頭としての立場に深い宿命を感じさせられる。

流石に両氏が時にふれ折りにふれて語り、且つ書くものに卒のあり得ようはなく、互いに両極端のことを云っているようで、又同じようなことを云っているようで、それでいて、チャンと自分の主張は終始一貫しているから大したものだ。五十年六十年の長い川柳生活には云い間違いや、書き間違いやら、辷ったり転んだりしたことであろうし、その都度、お互いに嗤われ、突っこまれ、蹴られ、飛ばされはしたであろうけれど—それは柳界だけでない—ちゃんと立ち直って川柳家としての姿勢を微塵もくずすことなく、今は知名の士として社会的な地位を保持する両氏に、僕は今更何をか云わん哉である。

現代川柳に僕は二つの流れがあるように思う。その一は詩川柳であり、他は散文川柳である。換言すればロマンチシズムとリアリズムの流れになる。但し詩川柳の中でも主情と客情があれば、散文川柳の中にも主観と客観がある。例えば日本の北に青森があれば南の果は鹿児島である。しかし青森にも北と南があれば、鹿児島にも北と南がある。といったようなものである。

そこで僕の提唱する詩川柳論は麻生路郎師と共にあることは、既に当誌の読者には耳がタコになるぐらいに聞きあきていることでもあるし、僕は今取り立てて語る場合でない。

僕は従来、散文川柳に就ては多くを語らなかった。万一僕の書いたもので、それらしきものを書いたとすれば、一昨年の終りごろ「須崎豆秋論」を連載した最初に、散文川柳に少し触れた点を読者は記憶されているだろうか。しかしその場合の僕は詩川柳（北）を分けて、主情（北＝ロマンチシズム）と客情（南＝リアリズム）とし、奥村丹路のロマンチシズムに対する豆秋のリアリズム。換言すれば、詩川柳を分けて、詩的精神と散文精神に峻別したのであった。

詩川柳を日本（現代川柳）の北端、青森に置くなら、散文川柳は南端、鹿児島に据えつけて比喩せねばならないだろう。

岸本水府氏の提唱する「本格川柳」に就ては、提唱者が一巨頭であるだけ、今だに大きな問題となっている。昭和五年十一月号「番傘」誌の扉に水府氏が直に宣言したその時以来のことでもあるから。

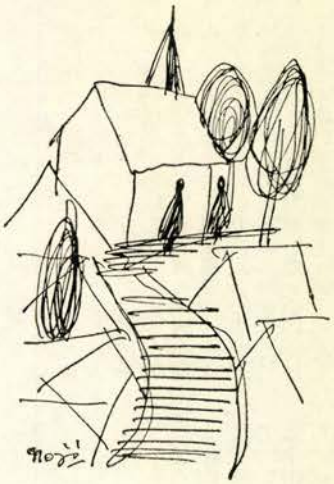
さて本格川柳は足元の「番傘」同人すら誤解しているぐらいだから、大村沙華氏や僕が誤って解釈するのは当然である。しかし誤解の重大な個所とする本格が伝統と直接結びつけようと解する周囲の見地を僕は昨年暮の「月へ行く道」で完全に切り離して、新古典主義の亜流と断定したことは、其当時としては本格川柳になる正しい考察であったと信ずる。

その後、僕は直接水府氏に訊きただし、資料の提供を受けたが、ひそかに期待していた如く、水府氏の真意とする「本格川柳」は現代川柳に存在理由あらしめるためには—当然ながら—僕の思考する散文川柳であったということを知った。

散文川柳とは詩川柳と対向する散文精神（リアリズム）による十七字散文句を云うことになる。

既に与えられた枚数が尽きた。僕に課せられた宿題として、散文川柳は後日をまたねばならない。

（一九六〇、四、十三）



句評

――四月号から――

清水白柳

病む部屋に母いてぬくし
如月の　奈良子

この句は川柳らしからぬ川柳でありまして、大凡そ川柳としては穿ちも皮肉も風刺も笑いもない句ではありますが、捨てがたい味わいを持って居ります、それは何故でしょうか、恐らく作様は、それは白柳好みのセンチな句だからと言われるかも知れませんが、それだけではないと思います、女性特有の、それも若くして病床にある女性の心情が訴えてくるものをひしひしと胸に感じられるからです。暖房というよりも、閨温めという方がよいような部屋に母娘がひっそりと居られる様子を想像させられます、人形もありましょうし、一輪差しには可憐な花が活けてあるでしょう、老眼鏡をかけて毛糸でも編んでいる母親の愛情をよく表現されて居ります、結びの五文字に如月のと余情を持たせて切った表現技巧もこの句の場合非常にプラスになっていると思います。

やりくりの二月小遣いね
ぎられる　芙路

この句は女性の句でありますから、恐らく小遣いを値切られたのではなくて、値切る方の立場にある人ではないかと思うのです。それは、やりくりという言葉がそう感じさせるのです、夫への小遣いを、正月には遣いすぎたから今月はこの位いで辛抱してね、といって小遣いを値切ったということを、素知らぬ顔で値切られると句にされたのではないかと思うのです、こうした作句法は面白いと思います、若し作者の芙路さんが未婚の女性であって、親から小遣いをもらって居られて、本当に自分の小遣いを値切られたのだとしますと、やりくりという言葉が生きて来ないように感じられます。

街に出た親娘のおごりき
つねそば　絵見

この句も女性の句ではないかと思うのです、雅号から見てそう感じたのですが、以前に雅号から見て女性の句だと思って、西宮の成子という人の句を批評した事がありましたが、成子と書いてセイシと読む男性の句だったということが、明和研究会の満秋さんが同会の柳誌に書いて居られたので知ったわけですが、この句は女性の句として申上げることに致します、都会に住んでいる人には想像もつかないような、つつましやかな、健康な母娘を目のあたりにほうふつとさせるものを持って居ります、町へ出てきたのだからと、素うどんでなく、きつねを食べたのを、おごりといった処に川柳の温かさというものを感じさせられました、帰りには恐らく夫への、或は幼い弟妹へのつつましい土産ものを持って居られることでしょう、そして町へ出た用事というのは、娘さんの嫁入り仕度の買物に呉服屋や家具屋まで立寄ったのではないかとまで思わせるものを持っている句であります。真実味のこもった味わいの深い作品と言えるようです。

時計みな頼りにならず朝
の曲　宗太郎

起きてくるとすぐラジオのスイッチを入れるのが一つの習慣のようになっているのが、私の家庭ですが、この句も時計がみな頼りにならないというのは一つのレジスタンスで、母親は遅刻させまいとして、五分か十分柱時計を進めて置くのですが、そんなことは百も承知で、ラジオ聞き乍ら洗面したり、御飯を食べたり、新聞を読んだりして時間一ぱい迄落ついているという、朗らかな穿ちを持っています、朝のラジオは、五分か十分位でスポンサーが変るものですから、そのコマーシャルで時間がわかるという事を、朝の曲と言い取った処にこの句の佳さがあると言えます。

双生児かなしいときも肩
を組み　麦彦

この頃売出している、ザ、ピーナッツという歌の上手な双生児の娘さんを思わせるような句であります、うれしい時はもとより、歌のときも、肩を組んだり、手を取り合ったりして居りますが、かなしいときも肩を組みとは、よくもここまで見つめられたものとその技巧に敬意を表したいと思います、私が採り上げる句はどうも川柳味がキハクだと言われそうですが、こうした味わいを持った句が、もっともっとふえていいのではないかと考えて居るからでしょうか

成田山頼るほかなきハン
ドルよ　みのる

風刺のよく利いている句であります、毎日何台か何十台かの新車が、三輪であれトラックであれ、自家用車迄が千円か何がしかのお札を受けに成田山へ行っているそうですが、私は本家の成田山へは参詣した事がありませんので知りませんが、この句は成田山関西別院というのでしょうか京阪線香里園にある成田山を詠んでいるものと解釈しているわけです、化学的なエンジンによって運転される、自動車族が、成田山新勝寺のお札をつけているのを見ると、根強い迷信のあり方を考えさせられます、京阪電車の運転士さんの処にもそのお札があるのを見ましたが、これは京阪電車のお得意さんだから仕方がないのだなと苦笑したものでした。

女給に欠伸され女房に欠
伸され　利男

われ乍ら退屈な男がということが、わかって居ながらどうにもならぬ男の心情をズバリと句に詠っています、キャバレーかバーへ行って金を使いながら、遊び上手でないために余り持てたこともなく、家に居っても、冗談を言って

ほがらかな雰囲気をつくるということでもなく、そうかと言ってそう気むずかしやでもないのに、どこかしっくりしたものを持っていないという中年の男性をよく描き出していると思います、ありふれた言葉を普通に使いながら、こうした立派な句が出来たというのは、表現の方法にあるのではないかと思います。同じ字句を二段に切って使っていることがよかったので男性の詠嘆を小気味よく出しています。

留守頼まれた手前物音立
てておく　　月　都

いい所をつかんでいると思います、人間の弱点といいますか、人の好い気の弱さといったものを穿っていると言える句です。留守を頼まれたのが男であってもいいし、女であってもいいと思います、余り静かにして居るとだれかがソーッと入ってきそうで、何だか恐いので、用もないのに戸を開けて見たり、しめて見たり、そこらを歩いてみたりして、自分に聞えるように、自分が聞いて安心できる物音を立てているという、非常にデリケートなものを感じさせられました。留守番を頼まれた手前という言訳めいた語句によって成功している句でこの手前というのがこの句の焦点であると言うことが出来ると思います。

柳界の滓

直原七面山

文学作品の優劣を決める場合には、それぞれの分野の現役作家の中から経験豊かで識見の高い人達が選者として選ばれ、厳正に選に当るのが最良の方法として遵守され実行されております。

したがって、川柳の選も、それがただ、庶民文学であると云うそれだけの理由から、この鉄則の枠外であって良い筈はありません。

ところが、（悲しむべきことには）川柳王国をもって自認するわが岡山県においては、この動かすべからざる鉄則が、一部不明のやからによって犯され、近年ついぞその作品にお目に掛ったこともないような人達が、あちこちの川柳大会に選者として登場しているのであります。

で、これは、岡山県における柳人達の文学知識が、認識が、水準がどんなに低いかを物語り露呈するものであって、決して褒めそやすべきことがらではありません。

で、こうした非現役作家に、選を依頼する者もする者ですが、また、選を引受ける方も引き受ける者で、これらの人の行う行為はどう欲目に見ても小学生並で、とうてい思慮ある大人のする行為ではありません。

なお、面白いことには、（実は誠に悲しむべきことなのですが）この非現役川柳人が、こともあろうに、なんと日本川柳界の大御所と呼ばれ、選者として第一級クラスの諸先生方と、厚顔無礼にも堂々と肩を並べて盲選の限りをつくし、（時にはそれらの大御所をさしおいて）柳談の一席もやってのけているのであります。

狂気の沙汰の限りであります。

こうした大会風景などを見ていると、丁度一巾の漫画を見ているようで、心ある川柳家としては、涙なくしてはとうていこれを望めることは出来ません。

なぜこのような無知もうまいなモウロウ選者が、川柳王国岡山にのみ誕生し、発生し、のさばり返っているのでしょう。

これは、どう考えてみても、常識では計り知ることの出来ない摩訶不思議な出来ごとであって、正に川柳七不思議の一つでありましょう。

ちなみに、こうしたモウロウ選者によって選句された作品を、大会句報などによって読んで見ますと、どうしても、現役諸作家の手によって選句された作品に比べて、それはもう格段の見劣りがし、しかも投句者との間におけるセンスの面においても、その時代的なズレは非常に大きく、気の毒で読むにしのびないような状態であります。

ですからこの作品上の事実（劣悪さの）に対しては、その方がどんなにそれらの選者びいきの人であろうと、よもやその技の拙劣さを頭から否定なさりはしないでしょう。

ところが、えてして、これらのモウロウ選者達は、口を開けば、川柳作品の質的向上について大言壮語しているのですから可笑しいではありませんか。

考えてみますと、厳正であるべき川柳の〝選句〟の行為を、或は〝名誉勲章化し〟或は〝功労章化し〟或はまた〝政略化し〟ている無知文盲な主催者や、モウロウ選者達はこれはもう、文学の冒瀆者であり、川柳の侮辱者であり、いわゆる〝選〟を私有物化する川柳ボスであって、川柳の発展阻害者の元兇であります。即ちまぎれもない〝川柳の敵〟であります。

従って、これらの元兇者が岡山の川柳界に現存する限り、岡山川柳界の前途は実に暗たんたるものであって、そこには一るの光明すらも発見することは出来ません。

悲しいことです。なげかわしいことです。

そしてお恥しいことなのです。

もし私達が、まこと川柳王国岡山をして、名実ともにその名を天下にとどめたいなら、こうした非現役作家による選句などと云う愚行を今後絶対に繰返さないよう、万全の努力とえい知を働かさなくてはなりません。

県の内外をとわず、全川柳人の好意ある御声援を得て、輝かしい〝川柳王国岡山〟の建設に挺身したいものであります。

（一九六〇、三、三〇記）

ある座談会にて

堀口塊人

阪神六都市文芸祭を記念して座談会をするから出席を乞う、との案内をもらって四月十六日土曜日の夕方、尼崎出屋敷の神戸新聞阪神総局の二階へ出席した。六都市文芸祭と云うのは、大阪・神戸両市を除く、阪神間の芦屋、西宮、尼崎、宝塚、伊丹、川西の六都市に在住する、詩、短歌、俳句、川柳の短詩作家各派によって作品の募集と発表が行われるのであるが、名のわりに内容は大したものではなく、従って新聞社の力の入れ方もどうかと思われる程度の会である。

座談会の方も、速記をとるわけではなく、テープ録音するわけでもなく、親子丼一つが出たあとは、勝手に喋れ、と云うような空気になってしまった。私はついこの間、私の関係している機械の業界新聞の座談会に出席したが、それは全部録音をとられていて、「これは公開の席上で言うべきではないが」とか「記事にしてもらっては困るが」とか云うことばが全部記事になってしまい、こまってしまったけれども、今度のそれは、どこまでが記事になるやらならぬやら、わからぬままにしゃべってしまった。他の出席者もそうあったらしい。そこで歌人、俳人、川柳人各二人ずつ六人の放談会になってしまったのである。

三種郵便の取扱がやかましくなったこと、発行日がおくれると届を出さねばならぬこと、附録と書かないで紙片を挿入してはいけないこと、包紙に前金切の判を押してそれに金額を書入れることは合法か非合法か、そんな事も大阪中央局はやかましいが、他の都市では親切な取扱をしてくれる事などが話題になった。そんな話を聞きながら、郵便の差出人は郵政局にとっては得意先ではないか、その得意先にサービスするのが民主々義ではないのかと、私は考えたが、発言しなかった。

原稿料などの収入、年額五十万円迄に対する源泉課税は、必要経費と認め、手続をすれば戻税してくれるそうである。私には縁遠い話であるから感心しながら聞いていたが、そのうちに、雑誌経営の話になり、俳誌「青玄」といえども、伊丹三樹彦さんが、毎月援助しなければならぬ事情を承ってそうかいなあ、と思い、川柳生活四十年の私が毎月川柳の為に出費しているのは当然と感じた。

そのうちに話はすすみ、関西のジャーナリズムが東京在住の文芸人を有難がる傾向について、それを非難する発言が多かった。私は、川柳に関する限り関西が日本の中心であって全くその心配のない事実を報告した。そしたら伊丹さんが、それでも若し、川柳綜合誌のようなものが出版されるようになったら、それはおそらく東京から出るのではないか、と意見を出された。私はそれはそうかもしれない、と思った。

口語短歌、口語俳句、と云うことばがさかんに出た。私は「万葉集は、当時の文語ですか、口語ですか」と聞いたら「それは口語と云う事になっています」と歌人の、頴田島さんが言われた。私は、昔の俳諧一巻には、文語も口語もどちらも使用されている事と、川柳では「かんてき」とか「でぼちん」とかを詠む事があり、そんな場合には口語の使用がふさわしいこと、その反対に「メーデー」風景なんかを詠む時には文語がふさわしい場合が多いと話した。大体、ことさらに、口語短歌とか口語俳句とか云うのがおかしい、表現は、自己の内在する心境に最もふさわしい言葉がよい筈であるから、作者の個性によって自由にすればよいではないか、と主張したかったが長い議論になりそうなのでやめた。そのあと「失業保険」を「失保」と詠んでよいかどうかについて、一としきり花がさいた。三十一文字の短歌と十七文字とでは少し意見がちがうようであった。

若い人があまり、短歌や俳句を作らない事について話が出た。伊丹さんのような、俳句としては新らしい傾向の吟社でも十年前の人々がそのまま十年としをとっている現状である、とのこと。私は、最近の国語国字の変革によって、現代ほど文字による表現を軽蔑している時代はないから、若い人はやらないであろう、と言ったら、それよりも、短歌や俳句に若い情熱の表現が出来ることをPRしないのがいけない、と言われた。そして

ビルの谷間に赤ちゃらけた繻私のトーン

と云う、廿台の人の俳句を示して、伊丹さんはこの「私のトーン」の、若さ、を激賞された。

私は、かつて、久保田万太郎氏が、だいたい十七字の俳句で若い情熱を盛ろうとするのが無理である、俳句はしょせん、老成の文学ではあるまいか、と書かれた事を思い出した。それを読んだ頃の私はまだ若かったものであるから、情熱を詠んだ事がない人、これからも詠まうとする意欲をもたない人、がそんな事を言うのはおかしいではないか、私達の作っている川柳をみてみるがよい、そこにはいくらでも若き情熱が詠まれてるではないか、と誌上に発表した。それから三十年もたった今日では、万太郎氏の意見が半分ほどわかるような気がしている。但しこれは席上では話さなかった。

やがて自由律の事が問題になった。私は

咳をしても一人　　放哉

踊る時には袖が魂　　武玉川

などの例を示して、自由律と云うからには短かい方も作ったらよいのに、長い方が多いのはどうしたわけだろう、と言ったら、先ず武玉川のそれは俳諧の附句ではないか、と反問された。たとえ附句であっても、一句独立して鑑賞し得る作品である、と私は答えた。そしたら、俳句の方の自由

律では、十七文字より短かいのもあるが、長い方が多い、との話であった。最近、二十四音律を提唱している一派があり、その根拠は、短歌三十一と俳句十七を合計して二で割った数字だ、と伊丹さんから聞いて、みんな大笑いをした。

この問題では、私としてまだまだ言うべき事があったけれども長くなりそうなのでやめにした。そもそも字律、音律、音節、音字、字音、韻律など、どの用語が一番適切であるかが問題である。文字でする表現には、文字としての制約がある。それに自由を云々するのはおかしい、表現方法とは本来不自由なものだ、と自説を言いかけたら、ここでは「自由」を論じているのではなく「自由律」を問題にしているのだと、頴田島さんが頗る頭の良い注意があったのでそれもやめにした。元来「律」と云うのは「語」を制約しなければ、生れない場合が多い。制約せずにほっておけば散文となるおそれがある。だから「自由律」と云うことばそれ自体がすでにおかしいのである。私は「語」を制約して「律」をもたせる事によって、そこに「旨味」の出て来るおもしろさを感じている。

又、短詩の世界を離れさえすれば、そこには自由詩の世界がある。右は土井晚翠の「秋風五丈原」から、左は、ボオドレエルの「悪の華」に至るまで、あらゆる傾向を包含してくれる自由の園である。何故そこへ俳風詩なり川柳詩なりをひっさげて登場しないのであろう。短歌や俳句や川柳のそれぞれの領域にたてこもって、なお、自由律を叫んでいるのは、まるで大きなグラウンドへ行かないで、道路で野球をしているようなものだ、と言いたかったがやめにした。

座談をすすめながら、私の頭は次第に俳諧の事を考えていた。俳諧には、自由があった、そして制約があった。一句としては俳句でも川柳でもよかった。口語も文語も自由であった。思うがままに個性を出すべきであった。しかし、そこにはあらゆる制約があった。発句は発句の平句は平句の附句は附句の約束があった。月の座花の座では表現にそれを考慮しなければならなかった。自由と制約、個性と調和による、連句交響楽こそ俳諧の姿であった。

私は最近の漢字制限やかなづかいによる国語変革の問題を持出したが、新聞社の楼上であったせいかどうかはしらないが、私以外に積極的な発言はなかった。明治以来八十年の文化的遺産を抹殺して古典化した、用字制限の暴挙を説いてもあまり共鳴者はなかった。ただ最近、土岐善麿氏が出版された作品集は、彼氏が新かなづかいの提唱者であるにもかかわらず、旧かなづかい、になっているとの話があった。私は、画家が使用絵具の数を制限されたと同じことが行われているにもかかわらず短詩界から反抗が少ないのを不思議に感じた。印刷文化の便宜の為に、明治大正の小説すら普通教育では読めないものにしてしまってよいのであろうか、文芸や美術は便宜の為に存在するものではあるまい。

しかも、用字の制限と変革は便宜の上からも甚だ不当である。今日以後、文学や法律を学ぶものは、必ず、漢字制限以前の漢字と、新旧両かなづかいに通じなければ研究が出来なくなる、以前よりは不便になるではないかと、指摘したが、現在の学生は既にそんな事になれてきているからかまわないではないか、と言われた。

私は、私の、漢字保存説や旧かなづかい論が、次第に世の中から敗北しつつある事を感じた。しかし、昭和三十年代に行なわれた、国字の改革は全然無条件で容認されたのではなく、いろいろ検討した結果そうなったものである事を、記録にのこしておきたいと思い、そんな事を主張した。

話の途中で、伊丹さんからしきりに「食えない俳句」とか「しんどい俳句」とかの言葉がとび出した。その裏には「食える俳句」や「しんどない俳句」には文芸価値がないかのような意味がふくまれているように感じた。若し、そうとすれば、これはつまらぬ、自己満足的な言葉だと思った。食える食えないは作品の価値に何の関係もない。作品の価値は商品価値によって判定されるべきものではない。だから、それによって、食う事が出来たとしてもその中に卑しい作品もあれば、文芸価値の高い作品もある筈である。創作の苦心の、しんどいしんどくない、はどこできめるのか。表現に、発想に、それ以前の人間的内容の形成に、どこでしんどい思いをするかは、第三者になかなかわかるものではない。軽くてよし、重くてよし、むしろ、表現に澁滯の痕をのこしているようなしんどい作品には、未完成のものが多いように思われる。表現は、しんどい痕を見せないところまで洗練されなければならない。これを言い出すと席上の空気を乱す事になるので言わなかった。

散会後、議論ではなかなかあとへ引かないような、出席者が、漢字制限や新かなづかい、に何の抵抗も示さなかった事について、考えてみた。私にはどうしてもそれが不思議でわからなかった。出屋敷から塚口へ出るバスの中でしきりにそれを考えてみて、おぼろげながらわかって来たような気がした。

私のような、ほとんどマスコミから相手にされない無名川柳人ならよろしいが、若し、少しでもマスコミに関係のある人なら、いつまでも、漢字制限や新かなづかい、に反対していては、原稿や作品が売れなくなる。あの人たちはそれをおそれているのだろう。それに、新らしい若い人々を仲間に入れようとすればやはり、新らしい用字用語でなければついて来てくれまい。だからマスコミの波に乗って、売れ易い作品、にする事は当然ではないか、それをさとらなかった私こそ大馬鹿者である、と感じた。

文芸ですら、都合や便宜の為に制約される、のは、ソ連だけの現実ではなかったのである。

結婚式場
長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか 貸衣裳一切を完備しております ●6階

金曜定休

松坂屋
大阪日本橋三

小式部内侍

冨士野鞍馬

大江山
いく野のみちのとほければ
まだふみも見ず
あまのはし立
小式部内侍

この歌は、定家選の小倉百人一首に入れられている。その詞書は、

「和泉式部、保昌に具して、丹後国に侍りける頃、都に歌合の有りけるに、小式部内侍、歌詠にとられて侍りけるを、中納言定頼、局の方にまうで来て『歌はいかがさせ給ふ。丹後へ人は遣はしけむや。使はまうで来ずや。いかに心もとなく思すらむ』など戯れ、立ちけるを、引きとどめて詠める」

と「金葉集」にあり。丹後へ行っていた母の和泉式部に、歌の代作をたのんだか――と定頼がからかったのに対し、小式部は即座に、この歌を作って見せたので、定頼は、返歌もせず、袖をひきはらって逃げた。この時小式部は十五、六才であった。

この事件を川柳は見逃がしてはいない。

大人をやりこめた歌も定家入れ　（タル二二）
小娘にいくのの道ではりこまれ　（〃四一）
小式部にいく野の道ではぢかれる　（〃八三）
まだ文も見ずとは娘やってのけ　（〃九九）
小式部が便り尋ねて赤面し　（〃一一四）
小式部は地理を巧者に口答え　（〃二六）
橋立と文珠も恥ぢる才で詠み　（タル一四〇）
橋立の和歌小式部が初舞台　（〃一一二）

などと定頼をやりこめたことをほめ

ちっぽけな口で大きな山をよみ　（タル三三）
大江山鬼も和らぐ名歌也　（〃五四）
歌によむ時はやさしい大江山　（〃二六）
敷島の道はやさしい大江山　（〃六二）
小娘の当意即妙大江山　（〃九七）
悪口の袖をひかへて大江山　（〃百）
定頼の顔紅葉する大江山　（〃七八）
小式部は形りにも似せぬ山をよみ　（タル五三）
小式部の手柄一首の大江山　（〃一三四）
小式部は歌道に鬼の大江山　（〃一三六）
返答のほまれ梅花と大江山　（〃一四二）

等々、大江山にかけて多く詠まれている。梅花は、宗任が公家衆をやりこめた歌である。

小式部はいくのの道をまだ知らず　（タル一一九）
小式部にいく野の道はちと早し　（〃八八）

は、末番に詠んでいる。また、この歌に対し

大江山文見た徳のさそく也　（タル五五）
大江山一人でいったからわかり　（〃タル四九）

は、感ちがいの作である。

大江山後のたよりに母は聞き　（タル一四五）
母母たるゆえ子子たり小式部　（〃一一三）

と母和泉式部をも詠んである。

小式部は、橘道貞を父とし、和泉式部を母として、長保二年（一〇〇〇）に生れたと推定されている。その翌年母は道貞と別れて、弾正尹為尊親王と近づき、その薨後は帥宮敦道親王と結んだ。また寛弘四年（一〇〇七）帥宮が薨じて、一、二年の後、中宮彰子に出仕したのであった。小式部は、その間、母の家で育てられ、十二才のころ、母に伴われて同じ宮に出仕した。母は間もなく、藤原保昌と結婚し、丹後に下ることになったので、小式部を、同僚の大輔命婦のところへ預けた。

大江山の歌は、その頃のことで、それ以来定頼は小式部に恋を感じたのであった。

ところが小式部は、寛仁二年（一〇一八）藤原教通（二条関白）の男子を生んでいる。その後も女子を生んでいるが、いつの間にか教通とは縁が絶えたらしく、その間に、教通の異母兄頼宗や、藤原範永とも交渉があったようである。そして万寿二年（一〇二五）十一月に、滋の井頭中将公成の子を産んで死んだ。時に二十六才であった。

母の夫藤原保昌の弟が盗賊袴垂康輔だという伝説があるので、

小式部が緋の袴までぬすみ出し　（タル五五）
おち様といふなと小式部を叱り　（〃一六）

などと川柳に作られている。

また、「忠孝名誉奇人伝」に「小式部は和泉式部が女なり。其頃何人か納めけん、北野に月に時鳥の名画の額あり。此額の時鳥音をはっすると、これを聞んと諸人群集す。或時小式部、北野に詣つひでに、この額をながめしに、音をはっする事更になし。『なけきこうききにきたののほととぎす』と口ずさみしかば、額に画かけるほととぎす、おのれと美音をはっせしとかや」

とあり、国芳の錦絵にも描かれて、それも川柳に詠まれている。

北野では義理づめで鳴く時鳥　（拾　四）
神前できの字を五つよんで聞き　（タル二六）
書いたもの物をいったは北野なり　（〃三一）
時鳥さようならばと鳴いたよう　（〃二二）
絵そらごととはいはれない時鳥　（〃二一）

可愛いい女

★★★

東野大八

★★★

長い間、結核で病棟生活をつづけていた御亭主が死んだ。

ところが、その亡骸を始末する段どりになって、その妻君が意外なことを病院側から聴かされた。一日おいて奥様もおなくなりになりました、という。ご冗談でしょう、故人の妻はレッキとしてこの私なんですよ、といったが、はじめのうちはてんで信用されなかった。貴方はお妹御なんでしょう、というのが先方の解釈。だんだん詮じつめて話合いの結果、病気療養中の御主人は、同じ病気持ちの情婦を作っていたことと知れた。つまり、日本政府に登録済みの妻君を妹に仕立てて、院内では情婦が女房、天下晴れての立居振舞というわけだ。

そんなあんばいとはッユ知らず、子のないのを幸い小さい証券会社に勤め、週末には必ず主人を見舞い、うなぎの長焼やら高い増血剤の新薬を運び、月末には食うや食わずでためた給料をほとんど治療費に支払ってきただけに、妻君の立腹は殊の他だったらしい。特に折角無理して運んだ長焼やらクスリを女も一緒に食べたりのんだりして、その余力でこの種患者に禁物のアノ方の足し前にまでされていたのかと思うとカッと頭へきた。

しかもですよ、一日はさんで行くときまで女といっしょで花のッテナでこの二人、肩を並べてなんというアホウな女よ、とこの自分をわらっているような気がしたときは口惜しくて、と妻君は拳をにぎるのである。

口惜しいのはそれだけではない。亡骸の始末に、姓は変らなかったが、名前の方が一文字多かった。つまり太郎を太三郎という風に変えてある。それはさきの病院から今の病院へ女とともに引うつる際、手加減を加えておいたのだと判ったが、病院側では、そんな誤りがあったのでは、事務手続上貴方にお骨は預けられないという、結局主事さんに袖の下のペニシリンを打って大目にみてもらったものの、今度は院内の患者たちから、私はあの人に千円貸した五百円貸したと寸借の山。

「ホントに泣くにも泣けません」といいながら借りは借り、かくて途方もないもの入りの末、小さい箱一つを貰い、わざわざ片道一日半という夫の郷里までお葬いの旅というおまけまでついてどうやらケリ。

「しかしねえ、出来の悪い人だったが、箱を抱いて夜汽車に乗っていると、しみじみ可哀想な人と、つい涙をさそわれて……」

というのが、今に変らぬ今日ただ今の感慨だという。

◇

養老院Fに年寄りの日の催しがあった。その中で、むかしとったキネづかで、踊りの下地十分な一老婆のスナップ写真が傑作だと新聞協会報に再録されたことがあるが、このおばあさんの話が面白い。

なんでもこのおばあさま、それは遠い昔、大阪南地で一、二をうたわれる売れっ妓のパリパリだった由。ところが船場のさる若主人とできて落籍されたが、そのことから生家の物堅い連中とのソリが合わず、亭主は義絶のッキ目。それもええやないか、と好いて好かれた二人同志の長屋暮しだが、ぼんぼん育ちだけに生活力はゼロ、かくておばあさんは二度の左褄をとる身となったが、甲斐性なしの落目の気なぐさみは所せんパクチ。

「それがあんたはん、みみっちい五十銭、六十銭という小バクチでしてナ、情ない人やと思ってるうちに、小バクチも蓄ってしまうと金かさが張って、とうとう始末に困って、あたいは新町へ百十円で身売り、南地の一流芸妓がついに明し二円の安女郎ですがな」

ところでその話のヤマは、新妓で初店の写真がいよいよ明日から土間の盛塩の上にかかろうという日。

「明日からお前が他人のなぐさみものになるのかと思うといても立ってもいられへん、というて前日からうちの人はわたいを離しやしませんのです。そしてその夜は、夜明しして話であけましたんやが、さて明けの日になっても離れられるもんやおまへん、小唄の文句やおまへんけど、なんで離れてよいものか、二つ身一つが真の縁、ちゅうてナ」

かくて一日伸ばしに居つづけがつづいた。何分懐中には身売りの金の大枚百十円がある、てなワケで渡す金さえ手をつけて忠兵衛、梅川を地で行く十余日——。結局かんじんの金まで大半つかい果してついに涙の別れ。

「アホウな話やと笑ったらあきまへん、結局あんたはん、身は売っても心は売らへんの女郎の気安め通りの長の勤め、今思うてもあの切なさ苦しさは昨日のようにこの胸の中が一ぱいです」

おばあさんはそういって涙をこぼし「何が苦しいというたかて、いろの道で苦しむことほど切なく苦しいものはおまへん」と至極キッパリといいきるのである。

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

胸毛まであるのに頭の方はハゲ　美祢市　安平次弘道
終電に遅れ落つくパイの音　同
花名刺社用でしょうと妻嫉かず　同
孝行の真似ごと寺へはずむ寄附　同
浅学菲才の市議が結構する汚職　同
呑ん兵衛の不満は飯の出が早い　同
身籠った妻へ内証の宝くじ　同
目の黒いうちはと斗志さかんなり　鳥取県　鈴木村諷子
陽炎の中から貨車を押して来た　同
花ビラを分けて西瓜の種を播き　同

讃岐に遊ぶ　二句

遠く来て同じリボンの親しまれ　同
餅を食え金はいらぬへひっかかり　同
馬鹿に馬鹿あつかいされてみる春　小松市　関戸宗太郎
世にうといだけが取得でまだ勤め　同
株少し持たせて呉れて左前　同
母さんが踊って運動会が済み　同
歯医者から出てキャラメルをもらねだり　同
クラス会すめば社長と平社員　同
チャルメラのこの辺貸しのあるところ　熊本市　田口麦彦
けだものがいま育ちゅくハイボール　同
株の値が上れば機嫌よい課長　同
思想すり替えて青年庶務課長　同
パーテンの機嫌が悪いホームバー　同
にんげんの弱さ噂へ向い合い　同
茶碗酒花が咲こうが咲くまいが　宇部市　上林粗影
押花に生命の長きことを知る　同
忙中閑あり磨くはステッキ　同
姑の過去はクスグッたく聞き　同
恋の三面鏡今では夫髭を剃り　同
馬券の山強者どもの夢の跡　同
若いのをつれてときどき炙をすえ　笠岡市　高木桃里
化粧法半日かけて見て帰り　同
街灯の届かぬところまで送り　同
信心と炙で辛抱する余生　同
聞き込みのついで刑事が庭をほめ　同
花嫁の指の太さを持て余し　宇部市　平田実男
点の良いテストは目につくこと置き　同

雑筆春秋

ホープの顔

酒井ひか平

ぼくは、南海ホークスのエース、日本選手権試合最高殊勲選手杉浦投手の顔を写真で見る度びに、今一人、この顔を持った人がある。それが誰れであるかが、どうしても判らない。何度思い出そうと思っても、喉の下迄出て来るが、思い出せない。

ところが、昭和卅四年度、兵庫県、文化賞授賞者、立抗焼の陶工、市野弘之さんの写真を新聞紙上に見て、ぼくは、「ああこの顔だ」と思わず叫んでしまった。

しばらく、市野さんと合わぬ、ぼくの記憶は失礼乍ら市野さんを忘れてしまって居たのであった。

それにしても、市野さんの授賞を我が事の様に喜んだぼくは、すぐさま祝電を一本打ち、その夜は、まるでぼくが授賞されるような勢いで「祝杯」をかたむけた。

そして、古新聞の中から、杉浦投手の写真を探し出し、夜の更けるのも忘れて二つの顔を眺めやった。

杉浦投手の顔も市野さんの顔も、こんな事をいっては悪いけれ

破産までさした学資で赤にぐれ　同
猛犬に注意の犬にじゃれつかれ　同
市役所の時計不良のまま三月　同

浩宮徳仁親王御誕生

皇子誕生この人即位の日を想う　羽曳野市　板倉天悟空
丘一つ削った土が売れてゆき　同

安保調印

極東の平和へまたも武器が要り　同
相談欄楽しく読めるのも他人　同
子を写す筈のカメラでヌード追い　同
少女趣味笑えば夢がありますの　愛媛県　竹田青園

三月十三日退院

退院の実感が湧く釜の飯　同
しびれたとぁっぁり云ってドライなり　同
箏曲でしずしず皇孫御誕生　同
生きる惰性日記は白い日が続く　西宮市　森本猛彦
美しき不貞冷たき唇寄せる　同
狂おしいジャズかけている寂しい日　同
口笛で今朝はデイトの髭を剃る　同
横綱に賭けぬ大穴すきな父　兵庫県　常岡孝風
花に浮かれることもなし手形割る　同
勤続三十年などと檜山近くなり　同
特殊学級持って結婚考えず　同

スポイトのいる万年筆でよく稼ぎ　愛媛県　大垣たもつ
温い顔押しつけ父ちゃん髭剃りや　同
予備校の優等生で舞い戻り　同
風邪ひいて寝る日が母の安息日　同
ウィー今帰ったぞ新宮ご誕生　石川県　高山清勝
春斗がすむまで逢わぬ約束し　同
電気料泣き泣き払う電化です　同
治山治水するに議員の歳費上げ　同
芸術論自己陶酔のなかにいる　西宮市　末沢花美
ペン習字だけに終った恋もあり　同
ハイボール今宵若さの悔いを呑み　同
男性の意地とは後ふり向かず　同
やけ酒も飲めずに下戸は空を見る　松江市　田中妖人
月賦で身を固めサラリーマン一年生　同
へそ曲りでもよし俺の道を行く　同
遮るものみな除けようとする若さ　同

川雑倉敷支部句会に出席して

二十四の瞳に温う迎えられ　笠岡市　出原真奇
麻雀のシグナル課長の背を越え　同
手に持って居るのも探す十二月　同
人生は忙中閑の酒を飲み　同
くたびれた百円札で薬代　滋賀県　土守蜻蛤
謡本だけ大切にしまう父　同

ど、別に、日本のホープという素敵な顔でない、金田投手や、別所投手や長嶋選手のように、スーパーマン的なものもない、平凡な顔であると思う。

その杉浦投手や、昨年、ベルギーの国際博でグランプリ迄貫った市野さんの顔が、そこらを眺め廻せば、どこにでもあるような平凡なサラリーマンの顔だと思うと感激もあり、一そう、親愛感が溢れて、共通の嬉しさを味わずに居られない。平凡と非凡は紙一重と思わせるところに、ぼく達の希望も湧いて来る。

どんな人達だって、磨けば光る球を持って居るのである。ただ、その持って居るものを伸ばすか伸ばさないかの違いであり、努力である。そう思うと、安かんとして居られない何かの力が、平凡なぼく達の心さえも引きたてる。これ

ヒゲそり後に…
●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン
配合
明色
男性
200円
アストリンゼン

鉛筆を削って呉れる孫になり　同
両肩の丸みがとれて妻も老け　同
井戸涸れて天気続きを思い出し　京都市　都倉　求女
テレビいいとこで散髪屋顔を剃り　同
桃の花活けたら寒波ぶりかえし　同
バタ車にも貧富の差ありゴムタイヤ　同
就職をしてお化粧はすぐ覚え　西宮市　樋口　寿栄
重役が揃い月曜手が足らず　同
親切にしたら年寄ぐちを云い　同
快方へ向い汚れをきたながり　神戸市　恒成　鯉太
中身だけ母が自筆の見舞が来　同
いつからか花瓶に花が無いベッド　同
課を挙げて寝込まれ達者が恨めしい　岸和田市　田端くにを

京都郵政研修所

入所式落第もある釘を刺し　同

老令年金支給開始

もう誰に気兼も要らぬたばこ代　同
歩行療法紅一点へ歩を合わし　貝塚市　護川　梢月
安静をぬけてテレビへしがみつき　同
麻雀で徹夜しだした回復期　同
主役だけ散髪してる学芸会　大阪市　本村　文福
火事事故死蹠出し記者も喰ってゆ　同
がらくたを手離しかねて狭く住み　同
自信ない顔で申告順を待ち　兵庫県　遠山　可住
おそがけにボスが出て来て否決する　同
秀才が意表をついた首をつり　同
暴政へ象牙の塔で見ておれず　枚岡市　春田　鎮海
失恋へバーテンの揶揄身にこたえ　同
座布団へタイト鮮かに膝を折り　同
御成人おめでとう市民税見逃さず　貝塚市　杉本　一鶴
背の傷へ痛いほど母の目を感じ　同
寝込みまで襲うて雑魚を挙げただけ　同
洗濯の軽い疲れに満足し　堺市　沢田　美喜
じらす手もある手紙書かんとき　同
喜びも悲しみも血圧心配し　同
ご先祖へすまぬサラリーへ雨が洩り　金沢市　山本　木象
札のシワ気にしてしれたゼニをため　同
坪万の地価を待つ間をほうれん草　同
備えつけの落書帳へは書く気せず　田辺市　室井八九寸
繁昌の裏は汚ないお手洗　同
子の棺へおもちゃを盃の出来ぬはど　同

皇室のお慶びに

指を吸う宮に未来の雲も晴れ　大阪市　宮原　敏子
側近がまた気の毒に批判され　同
隣からCMソングで子は戻り　同
けちんぼを笑わぬ方が貯めており　笠岡市　守屋衣里子

が闘志だろうか。ぼくは二つの写真を今以て出して見る。

野球の選手と陶工、何と面白い対照でないか、そして瓜二つの顔。栄光の共通など、どんな職業にだって励めば励むだけの張り合いはあると信じ、個性の練磨を怠っては居られない。それが陽の目を見ない儘に終ったっていいのではなかろうかと思うのである。

療養雑筆

杉本一鶴

十年来の斗病生活へ心静かに療養に専念して居るある日の夕食の献立。

まぐろの刺身、豆腐のすまし汁、それにとろろ汁と割合結構な副食に食慾が出る。

真白いとろろ汁へ卵でも入れようかな、と思い乍らも、〃まあええや、しまつしとこ〃と醤油を少しおとして味みをしてみると、どうも味がおかしい。何んとも云えぬ甘い舌ざわりに捨てがたい味があるし、酒粕のような味もする。〃まてよ、おかしいぞ〃と、ふと気が付けば、今月は三月三日ひな祭。〃何んや、白酒やないか〃と気付いた時の何んとも云えぬ複雑な気持？

最近の療養所は、昔と違いかなり自由にはふるまえるようになったとは云い乍ら、私が十年間の斗

形身分け明治のセンス批評され　同
幸せを着物の数で女云い　同
全甲で作家と親はきめて居り　鳥取市　岩田八文銭
税務署と応待するに深呼吸　同
小説が売れお隣に見なおされ　同
人生は酒めおと酒通夜酒　青森県　木村涼人
酒うまし来賓席がみな帰り　同
バス揺れて何がおかしい若夫婦　同
恐妻も子供の目には甘い母　山口県　藤本星二
共稼ぎ妻の帰りを少し妬き　同
芸術でない絵のほうがよくわかり　同
雲影に小石投げつけ山羊といる　勝田市　飯野仙台子
財布忘れたとおごってほしいらし　同
朝そっと美しい仮面をつける　同
一徹なとこも名士の美点にて　田雲市　山本朱紅
春雨に雀の恋もぬれており　同
チューリップさして女の匂う部屋　同
分別が漸くついた頃に病み　鳥取市　近藤昭夫
落第をした先輩に励まされ　同
春うららせめて布団を干しましょう　同
台風の爪あと深き伊勢の森　岡山県　横山一声
フイルムを使い果して旅終り　同
恋破れドライ娘に逆もどり　大洲市　村田淑滋
定員に足らぬ入試も気にかかり　同

黙否権神を信ずる瞳ではなし　京都市　大久保和三郎
かぶりつき隣も補聴器かけた人　同
鼻唄と無口試験の帰り道　鈴鹿市　吉田俊和
遅れてた時計を見せてネジをまき　同
取って来た時だけパチンコの話　大洲市　横田放人
訪う人も手ぶらになった過去の人　同
気晴しに来たらはよ嫁とれとれと　大阪市　今西生蓋
テレビ見て待つ長距離の借り電話　同
挽回を急げば石にけつまずき　倉敷市　藤岡萌芽
国産車もう気に入らぬ金が出来　同
どなってはみたが後悔だけ残り　下関市　藤田雪峰
筋通す積りが義理に負けてくる　同
社交ダンス習うてからの浪費癖　大阪市　堀風船堂
香車とメダカ行き当るまでのぼりつめ　同
児を貰う話に女将又出掛け　岡山県　福田祥男
真相と聞けば同情馬鹿らしく　同
アルバイトする子を起すべが鳴り　竹原市　山内房子
墓地にまでつくしがはえている故郷　同
寒椿大胆に折る嫁き遅れ　徳山市　渡辺伊津志

路郎師を偲ぶ

情熱の燃える人生伸びに伸び　同
次男坊だけが取得で嫁にやり　羽曳野市　見本泉洋
貫禄が出来て女に甘うなり　同
病人に食えぬお見舞派手に積み　竹原市　山内静水

病生活中、酒と名の付くものは、甘酒すら出た事はない。まして配膳に白酒が付いていたとは、配って来た看護婦さんですら知らないのであるから、アチコチで失敗をやらかして居る。

卵を入れる人やら、御丁寧に御飯にかけた人もあるとかで〝てんやわんや〟

一言白酒であると、前もって知らせておいてくれたら、どれだけ美味しく舌づつみを打っていただけたろうにと思うと、折角の親心も無駄になった事が腹立しい。

白酒へ醤油おとすも療養所

○

昨夜まで降り続いた雨も、今朝は、からりと晴れ上り、空の青さが目にしみて美しく、手術台へのぼる私の心も、何んの不安もなく澄んで居る。

と申しますのは、第二回から通算三回、どう云う訳か、何時も手

心斉橋筋大丸前
電話㉗三三四四番

温泉の疲れ我が家の湯に忘れ　同

ピアノ寄附税金しぶるとは見えず　岡山県　楢原　万女

両腕に腕輪をはめて医者通い　同

気を許す場所神棚に置き忘れ　児島市　伊丹柳瓢子

ライバルが湯気の向うで法螺を吹き　同

親の夢子の夢ふとんはね飛ばし　松江市　岡崎　祥月

トイレット鍛をはたいたコンパクト　同

眼鏡を探す癖が出来父老ける　竹原市　松井　可笑

赤電話どこまでつづくハイヒール　同

バスガイドの誤り正す客がおり　青屋市　里田一ン十

陋巷に死す院号を頂いて　同

新婚のおしゃれ気長に待つたばこ　大和五条市　尾来　絵見

新婚へ出戻りの姉近寄らず　同

労組幹部末は参議の夢を見て　大牟田市　高田　抱逸

赤旗へなびかぬ正義無口で居　同

お人好しだからあとから腹を立て　竹原市　杉原　愛鳩

春や春妻は財布の口をしめ　同

スカートの重しとなってねる軽さ　兵庫県　河原みのる

ひとさまが山売りゃはるとヤキモキし　同

島巡り春のコートをさげ歩き　岡山県　杉本たつよ

獄舎にも春はおぼろな月が出る　同

老いらくの静かに銘菓つまみあい　松江市　野木三叉路

家庭療養さぼてんの鉢殖えてゆき　同

結婚ブームにいらだつ女事務　西宮市　三上　芙路

幸福な目差し妻も桜色　同

財産へ欲が残ってドック入り　大阪市　藤富　淀月

セールスに向かぬ男で倉庫番　同

秒針を合わす気性で病み続け　大阪府　高橋　尚史

全治して来れば療園花ざかり　同

ビタミンの足らぬからだに炙をうえ　宮崎市　野口卯之助

小商人首に財布の紐をかけ　同

医者代が要ったと思って今日も飲み　須崎市　高橋　蟠蛇

銭湯の話題やっぱり花のこと　同

細菌でとった博士で外科をやり　奈良市　内海　敬太

真夜中の捜査本部はうどん喰い　同

おかっぱのまま成人を臥てむかえ　和歌山県　木下　一休

不器用なくせに道具は揃えて居　同

ラッシュアワーパン得る顔のんけんき　大阪市　白石　由美

湯たんぽの水そのままに春になり　同

仮釈放万歳の声に迎えられ　布施市　坂上山椒坊

赤い羽根避けパチンコ屋で取られ　同

菓子屋から酒屋へまわる客があり　豊中市　寺田　花宵

里帰り孫まかせきりよくしゃべり　同

初恋に似てほのかなり桜餅　愛媛県　菊池喜与史

大胆なポーズよこれも生きるため　岡山県　鳥取　周甫

まだまねき猫を信じている女将　大阪市　中西兼治郎

人を見る眼なく学歴重視する　川西市　佐伯　九紫

火吹竹吹いてた女がイヤリング　笠岡市　高木　渋柿

コーヒの味

モダン川柳

心斉橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ㉗6684

御集会には階上御利用下さい

術日は快晴に恵まれ、太陽の慈愛が、私を見捨てはおらぬと、生命力の強さを教えてくれるような気がする。

しかし、三度目の手術は、何んとも云えぬはげしい痛みに、顔中がグチャクチャになる程しかめ面をこらえて居ると、〃今度は大分こたえたらしいな〃と外科医長も云う。

一回二回とも、喘息の発作で、死の直前まで追い込まれ、サンソを二本ずつふるに出して苦しみ抜いたけれど、痛いとは余り口に出さない私だったので、〃辛抱強い人や〃と看護婦さん達も、よく云っていたのを耳にしたが、今度だけはその言を返上したい。

〃パピヤトゥ〃とか云う麻薬を、わずか〇・五ミリ注射してもらうと、嘘のように痛みがとれ、何ん

一本で屋台を購うた程に酔い　加賀市　木村　一路
カンニングあんなに知恵があるのなら　小松市　筒井　吉枝
コンクールへ出す気の家計簿余裕あり　大阪市　西本　保夫
グローブを貸したに球拾いやれと云い　笠岡市　松本　忠三
選りどりの口調で娘の数売り歩き　福岡県　阿部たけし
桃の花それきり逢わぬひとになり　岡山県　花柳花乃子
町役場課長の椅子の多いこと　兵庫県　斉藤たけお
一年の短かく今日の永いこと　大阪市　松谷　政俊
鞄にも世界一周の箔が出来　羽曳野市　坂東よしあき
天皇のお言葉まねる世と変り　和泉市　末田　晃康
花の値にたまげ牛肉買うとする　貝塚市　辰己忠太朗
重役の顔も知らない菜葉服　玉野市　小谷　仙山
結局はメンフラ貼って母なおり　七尾市　松高　秀峰
聞きなれた電蓄新館でよく響き　河内長野市　森本黒天子
赤旗は知らず苦面の資を送り　笠岡市　谷本鈍愚坊
歓迎と書いた質屋に断られ　神戸市　吉田　隆史
スラックス夢もセンチもない少女　大洲市　冨永　健朗
卒業の涙校門出てとまり　大阪市　種谷　敏明
子煩悩山に苗木を植えて死し　松山市　河本南牛史
白痴一億東京で働く気　伊丹市　小川静観堂
終電で帰る独身まだ続き　大阪市　堤　勝三
薬局の隅のもぐさの売れており　笠岡市　大内　尉介
茶羽織も念珠も身につく年となり　豊中市　土井　北桐
売店の前スクラムの花見客　笠岡市　佐内　隆文

春なれや発情の牛鳴き止まず　山形県　菊地　白葩
失業へチョビ髭ながらよく目立ち　宇部市　神田　豊年
涙なぞ見せまい恋の散る間隙　布施市　久米奈良子
今日の幸銀婚にも金婚にも続くよう　貝塚市　貝塚仁智坊
春風が甘いと思う病上り　呉港市　児玉　不村
栄転も左遷もなくて畑を打つ　岡山県　藤原　秋月
お化けまげ付けたまんまでよく眠り　大阪市　稲森けい女
愛の「ムチ」親には高い授業料　京都府　真野　康彦
プロパンになって消つぼ邪魔がられ　倉吉市　奥谷　弘朗
師の恩は蛍雪ほどのうすれ方　堺市　武田軍治郎
金儲けせず金持も羨やまず　玉島市　井上　旭峯
我が家の餅は三日で松が過ぎ　大阪府　橋本　裕邦
チャンバラが好きだと云えば子が笑い　大阪市　福井　昭
朝火事の寝巻姿も見せてくれ　西宮市　酒井　丹謡
新世界又もめている人だかり　富田林市　尻谷増治郎
有名人無名の昔恋しがり　ホノルル市　並木東田楼
交渉が煮詰って来て酒にする　大阪市　叶岡　史風
鷹揚に構えてデパートで遊び　西宮市　川村　山友
入学へ服のボタンがよく光り　今治市　越智　一水
歌謡曲ペンのすすまぬ原稿紙　大阪市　山田　蛙水
手土産を提げてこの世の住み心地　北海道　辻　晩穂
バスの中信心の杖もてあまし　大阪市　川口　弘村
芸術家親が夢みて子が躍り　大阪府　井上美恵子
十代の夢に故郷は狭ますぎて　布施市　仲野　千里

とも云えぬ程気分も良くなるが、私の場合は心臓にも不安があるので、皆なのようにおいそれと、打ってくれない。

〃出来るだけ辛抱をしなさい〃と、そう云う時の看護婦さんの横顔は、うらめしい程冷めたい。

まして、最愛の人を亡くして一カ月余りの手術なれば、気力的にも前のようには頑張りがなく、只むしょうに亡き人のまぼろしを追うばかり。それで、心の内で手を合せ、若し本当にこの世に霊と云うものがあるなれば、現在の私のこの痛みを取ってくれるようにと、念じつつ名を呼んで居る内に、ウトウトと寝てしまったらしい。

注射も打ってくれず、なかば捨鉢な気持だっただけに、あれだけの痛みを忘れ、少しの間でも眠むったと云う事は、今持って不思議に思う次第です。

肝疾患・疲労・二日酔
★総合強肝剤
ウロコ印
第日薬品
20錠　300円
100錠　1.200円
リポコール
(12種の成分を配合)

川柳夫婦善哉（5）

―摩天郎と徳子―

訪問者　丸尾潮花

名カメラマン光輪氏がキャッチしたご両人の笑顔です。

摩天郎氏と徳子さん

茶人利久を生んだ堺、昔から漁場として栄えた堺、その堺市九間町の住いに、摩天郎夫妻をお訪ねした。摩天郎さんは、川雑の総務部長であり、三和自動車工業の社長さんである。曽ては堺市役所や大阪府庁に勤務され生え抜きのお役人様である。夫人徳子さんは川雑友の会の理事として金泥集にも常にいい句を見せられている。四面を緑の庭に囲まれた一室には路郎先生の

いつまでもにくとねぎと
の仲であれ

の句がかけられてある。松風の音がしそうな茶釜もいかにも堺らしい感じと旧家と言う匂いを与えてくれる。

潮花「早速ですが、生活即川柳と言う日常を送っていられるそうですが、今日は一つ御夫妻の句のなかからお話しを伺うことにしたいと思います」

摩天郎「そおだんな」と摩天郎さんはうなずきながらいつもの低い声で話される。

潮花「奥さんの句のなかに

胃のいたむ夫をさする午
前二時

なぞの句がありますが、常に胃がお悪い様ですね」

摩天郎「この頃は一寸調子がよろしおますねん、二月には胃のために潮花さんの企画を崩しまして済みまえなんだ。もう胃の痛む時なんぞ、此処だけの話だすが、会へ行っても作られしまへんし、作句するどころやおまへん、つろうてな」と摩天郎さん当人でなければわからないと言った顔をされる。徳子さんも午前二時の句を思い出されたのかひとり笑っていられた。

潮花「そうそう徳子さんの句に、ご主人を詠まれたものだと思いますが

わが夫の髭が電車でよく
目立ち

というのがありますね。あれは摩天郎さんが役所にお務めの頃、髭を置いていられたと違いますか」

摩天郎「違いまんねん。わたしの髭は無精髭だんねん。ひとみたいに剃らしまへんねん」と今日も少しのびたあごを右手でなでながら徳子さんの方を見てクスクスと笑われる。

徳子「家に居たはりますと、そないに目立たしまへんけど、電車なぞに一緒に乗りますと、よう目立ちますねん。他所のひとは、こないに伸びて、乗ったはらしまへんですさかい」

摩天郎「務めて居た時言われましてん。散髪をしたらお前ほど目立つ男あらへんと言われてな。平常のばし放しだっさかいな。散髪したら、よう目立ちまんねん。徳島の阿波踊りに路郎先生らと行った時も、帰ってから、アイスキャンデーをふりまわして踊ったはったのは、あんた一人や言うて笑われてますねん。あんまりすべてにかまわん方だすさかいな」

潮花「そう、そう、キャンデー持って踊ったはりましたな。栞さんの奥さんか、梨里さんが呉れやはったと思います。あの時は徳子さんも踊ったはりましたな」

徳子「踊る真似でもせんと道を通してもらわれしまへんでしたから」

潮花「街中が踊りの渦で踊る阿呆だけしか、巡査さんが道あけてくれやはらしまへなんだな。路郎先生が川柳漫画の行燈かついで踊ったはりましたがお元気でしたなあ」

奥さんの機転奥さんお留
守です

摩天郎「その句は私の句だすが私が出かけますと毎日家に居るのは家内一人だけになりますねん。色々な物売が来たり、新聞屋などが来ますと断るのに困りよりまして、自分で奥さん今お留守だす、と言いよりまんねん。もう歳もいってますし、エプロンかけてたら、女中さんや思て帰りよりまんねん」

徳子「毎日会社へ行ったり学校へ行ってしまいますと私と犬だけだすさかいに、おかしな人が来やはったら、いつでも奥さんお留守です言うて帰しますねん。私は市場へ行く位でどっこいも参じまへん。婦人会やお寺、それも行ったり行かなんだり、友の会だけはお許しが出ますもんですさかい、その他は犬と二人きりの毎日です」

もう家庭のなかのいいお留守番の奥さまでいられるらしい。

摩天郎「胃に灸をすえてもろうたことで思い出しましたが、家内を貰ろて四年間子供が無かったんだす。昔はよく三年して子無きは去るべしと言いましたが、うちは四年無かったのだす。或る人から竜田川の、こしき塚に家伝の灸をすえるところがあると聞きまして行って見たら当ったのかどうか女の子が生れましてな。その名前をつけるのに灸で出来た子やさかいに、あつかったよって、あつ子、とつけようか、線香やさかい、せん子にしようかなど言うて笑ろたことがありました」

徳子「それが、きいたのか、どうか、わからしまへん、けど遠いところからも行きやはるそうです。今二軒あるそうですけれど、車で行くとリベートのある方の家に車をつけるそうです」硝子越しに見える庭先へ可愛い小鳥が飛んで来て遊んでいる静かな日曜の午後である。

川柳以外では夫妻は詩吟に趣味をもっていられ、摩天郎さんは堺吟詩会の支部長をされていられたそうだ。

摩天郎「詩吟は川柳と違うて家内の方が上です。いつでも引ぱってもろてまんねん。利久忌の時も二人で出ましたが、あの時もひっぱって貰いました。もうあきまへんわ」と詩吟に於いては徳子さんに一目も二目も置いていられると言う睦じさである。川雑友の会で徳子さんの詩吟菅公を聞かせて頂いたのも近い日のように耳に残っている。摩天郎さんは川柳を作られる以前、昭和六年に路郎先生の序文を頂いて歌集「環境」を発刊していられるのを拝見して、若かりし日の摩天郎さんの情熱におどろいたほど、恋を詠まれたものが多かった。

恋かたる夕にもよし泣くによし
潮の岬の波のさざめき

子供達が揃って学校を出たら、また何や彼やと忙しくなりますが、今は楽ですと口にされる摩天郎さん夫妻にも、苦斗の日のあったであろうことは

訴訟して妻子が幸に生る
日々

の句を見ても胸に迫るものがある、どうかいつ迄も、にくと、ねぎとの仲であることを願って筆を置く。

（カメラ・村山光輪）

壽の子

浜田久米雄

一人娘に良縁を得て息子をもらったのが昨年春であったが、いつしか腹帯をしめることになりいぬの日大安を選んで着帯の儀となった。晒木綿にはぜひぼくに寿の字を書いてもらいたいというのでぼくは楷書は具合が悪いと思いつづけ字の寿を書いてもらって妻といっしょに帰宅した。娘が結婚してから若夫婦を郷里に残し老夫婦は岡山の官舎生活をしているのである。

さて晩方、まずお目出度いことだというので祝酒でほろ酔い、岡山で書いてもらった手本で新聞紙に何回も寿なる字を書いて見た上で二組の腹帯のはしに墨こんあざやかに書き上げたのである。つづけ字なんか書いたことがないのに酒の酔いも手伝ってまことに美事な寿の字が出来上った。

ところがどうも長い布に一文字だけではもったいなくも惜しいような気がして一つ句を作ってやろうと考えた。寿の字を入れてである。それには娘の承認を得なければならないので話すと、よい句なら書いてもよいとの返事で沈思黙考の末、寿の字の右にどちらでもよいと書き左にの子を願いとやった。

どちらでもよい寿の子を
願い　久米雄

となったのである。もち論男の子でも女の子でもよいすこやかで元気な子が生れて来るのを乞い願うという意味である。

娘らの顔、妻の顔、そしてぼくの顔、にっこり笑い合って見合わした顔はいともなごやかで、すこし涙が出そうな感激と幸福感にひたったぼくはこれが人生の幸福のひとこまだと思った後で、寿の子ができたらぼくはおじいちゃんになるし妻はおばあちゃんになるんだとしみじみ考えたのであった。

★★ 川雑明和病院 支部強し ★★

俊英明和に多し——これは誰もが舌をまく事実である。それもその筈、支部の中で別に研究会まで作り、句のけんさんにいとまがないという熱の入れかたである。

句会の成績をみても、一月には指導されている栞氏が不朽洞賞、二月には夢虹氏が2句、すゝむ氏が1句とそれぞれ天位をとり、三月には舟遊氏、四月には牧人氏、菁風氏が2句天位、そのうちの一句がこれまた不朽洞賞である。まことに恐るべき迫力だ。

若さの勝利だと思ったこともあったが、けっきょくは熱の凱歌であり、ファイトの勝どきでもあったのだ。

句会の全出席者をながめてみても、明和出身の作家がずらりとならんでいる。そして句会の一角にこれらの人々が、つつましくはあるが、その陣を布くときは、ある威圧感を覚えるのである。古くさいが一騎当千という文字がピッタリくるのである。

（F）

大阪—名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに大阪・名古屋伊勢を結ぶ 準特急

特急券・準特急券（座席指定）
お求めは ご乗車の5日前から

近畿日本鉄道

絵と川柳で表現する歴史（第五回）

戸田古方

⑧ 殷と周

ていろいろかわりますが、ここでは一番古い殷と周のことを見てゆきましょう。

インドがすむとこんどは姑娘の国中国の昔話になります。中国の国名は時代によって国として知られているのがこの殷でありまして、華北の安陽は殷墟といって、そこからいろいろの遺物が掘り出されているのであります。その中で一番興味のあるのは絵から字がうまれてきたことを教えてくれる甲骨文字でしょう。またこの時代のものである三足土器は入れものであるとともにコンロをかねた蒸し器であります。

殷のあとに出来たのが周でありますが、この時代は中心の力がそれほど強くなかったので、封建制度がとられました。しかし世が乱れはじめますと、孔子や老子という学者がいろいろ人間のみちを教えて、世の中をよくしようと努力します。しかし、それらの努力にもかかわらず、ますます乱れ、戦国時代となり、秦に統一されます。殷から周にぎつぎにつたわって来たようです。中国史上はっきりあっ人間も文明も大体西からつ

辞書をもう一度

誤字と誤植——

不二田一三夫

相当ながい間、ものを書いている人が「絶体・にそうでない」と、〃体〃を書いている。

「絶体絶命」というなら〃体〃でよいが、これは、「絶対」でなければならないはずであるが、学窓をはなれたころから、いつか誤字のまま何年もの間、ずっと気がつかないのであろう。こうしたアヤマチは誰にでもあるのではないかとおもう。

古い友人に、「御撫・沙汰をしました」と〃無〃を〃撫〃と書くのがいた。二十年以上の交友を結んでいるが、こんなだれでも知っている文字をまちがったまま、つい最近まで気がつかなかったのである。

彼に通信するときは、わざと「ご無沙汰」という書き出しで、特に〃無〃という文字だけ、活字でいうなら一号ほど大きい目に書いてやっていたのである。

——なぜ、もっと早く言ってくれなかったのだ、意地がわるいなァ。

と、なじられたが、勉強はひとりでするもの。というのがぼくの持論なのである。だからぼく自身、ものを書くのはこわいし、また校正には毎月身が細るおもいをしているのである。

つい最近、定年でやめたが、朝日の校閲部にいた友人が、

「校正はど気を使うものはない」と、もらしていたが、一流紙ともなれば、われわれの想像以上のものがあるのであろう。

二十七才で死んだ石川啄木が、その生涯での最長編の小説といえば「島影」である。その「島影」とは「静子の悲」という題を改めたのだそうである。

ところが、岩波版啄木全集などによれば、岩崎正氏あての啄木書簡には「静子の恋」となっているという。しかし、啄木は、日記ほかには「静子の悲」としていたそうである。

「悲」か「恋」か、ということになる。（読売新聞・近盛晴嘉）

——口写し。という上五からはじまって、句意は、母から子へ、食物を口から口へ移すのがあった。これは「口移し」でなければならない。原稿どおりでも誤植というケースもあるが、果して、啄木の場合はどちらが正しいのであろうか。口写しの句の場合、口述の意にとられるとボツになる。

かけて立派な青銅器がたくさんできました。

○

シナ人の不幸は堯舜忘れかね
人間の愛を仁とは申すなり
進歩とは不幸をふやすあいことば

○

㊈ 秦と漢

大きく無理と道理とかいておきましたが、功をいそいだ秦は十五年でほろび、おちついて、つかうべき時を十分につかった漢は前後四百年もつづきました。いずれも中国史上の大国でありまして、シンはシナの語源、漢はそのまま、今日に至るまでシナをあらわすことばの代表になっています。二人の人物はもちろんシンと漢をあらわしているのですが、ひとりは息が切れて落伍してしまい、他は自分のペースをみださず、ぼつぼつ進んできたものでした。この二つの国をみくらべますと人生のよい教訓が得られましょう。

漢こそはシルクロード（絹の道）によってヨーロッパと交通した国であり、北方のフンを西に追いはらい、やがて民族大移動をなさしめた国であります。

○

厳法を一つふやしてほっとする
廣美人草楚歌をうたえばややしおれ

蚕史にふれてローマの経済史

○

★ ★ ★

葉光氏の声を

深夜放送に聞く

木村十悟

——あるく楽しさ小説

——ひょろひょろして歩く

大阪放送深夜電話連絡が電波に乗ってきた。「葉光さんの声だ」はっとしてスピーカーをちょっとまわしてみた。まぎれもなく葉光さんの、あの聞きなれた口調である。風邪気味か、すこし声がかすれていたが、それがハッキリ葉光さんとわかったのは、

「小学校三年の時にケガをしてから、ずっと身の不自由をうしない」と話しておられたことだ。

葉光さんのことは、豆秋先生からもよく伺っていたし、また「川柳雑誌」にも載っていたのでよく知っていたが、それでも胸にジーンとくるものを感じたのである。

葉光さんは、斗病生活に対する趣味について答えておられたが、こと川柳というとこでは、特に声を大きくされたようであった。テレビやラジオによる知識や、月一回の句会に出席して川柳する楽しさが、今日の生き甲斐であると、その話を結ばれていた。

趣味というより生活であろうその川柳に、今日の葉光さんがあるのだろうが、葉光さんが川柳人としてあるのは、これは家族の方々のなみなみならぬご協力と愛情があったればこそである。

句会の出席は夜あり、昼ありである。雨もあり、風のある日もある。それでもご商売の手をとめて、ハイヤーに単車に、葉光さんを乗せて送り迎えをみなさんがしておられるのである。その兄さん、甥ごさん、店員さんらの葉光氏に対する愛情というものは、まことに美しいものであると、いつも私達は感心している。

どうか、いつまでも葉光さんの足となってくださるよう、柳友の一人として、肉身の皆様にお願い申します。

同舟近詠

今治市　長野文庫

云い勝ってそれから客が来なくなり
取材記者小腰かがめる時もあり
有難い言葉の祝辞みな忘れ
寝つかれぬ金額僅か二三万

和歌山市　秋月宏方

火葬場に勤めていますともいえず
幸福を祈り続けてくれた親
背のびして歩いてるのでないキリン
余生淋し嫁ぎ遅れし娘と暮し

新居浜市　月原宵明

名士とは理髪の椅子で眠りこけ
産制を歎く明治の産婆さん
ベレー帽若い頃には社会主義
よい父であったが平で定年し
社長訓示又もや丁稚の頃が出る

川柳姉妹

――西出一榮さんと酒田清子さん――

★★★★

さきごろ七周年記念句会を盛大に催された、川雑玉造支部（大阪市）の西出一栄さんご姉妹とお会いする好機を得た。

玉造支部育ての親は清水白柳氏であり、二代目支部長は徳永雅美氏である。しかし両氏ともご多忙で、支部にちいさな危機もあったようだが、清水一家と称されている一栄、清子さんご姉妹や、井平、柳宏子氏ら熱心な人たちが立ち上がり、見ン事七周年を迎え、葭乃先生をはじめ名選者、好作家多数の柳人から祝福をうけたのである。

一栄さんは当時を述懐して、

「一時はどうなるかと思いましたが、アベノ支部金井文秋さんらの友情に救われ、支部員の団結が実を結んだわけです」

しかし多忙な主婦としての一栄さんが、支部長代理としての重責を果している蔭に、ご夫君甚也（柳号）氏の協力を忘れてはならないであろう。夫が川柳する場合、ついて行く妻はたくさんあるが、その逆の場合は、たいてい女流作家は消えていくようである。

「私がやる代りに、一栄にやらせているのです。私も川柳が好きですが、事業の関係上、二人がやるほどヒマがないのですよ。だから一栄の作品は、つまり私が、一栄に川柳をさせる時間を与えているので、云うなれば夫婦一体の川柳ということができます」

まことにお羨しい話である。

「こんないい旦那さまをもった姉は幸福です」

と、清子さんが口をはさむ。

「この部屋も、きょうはキチンと片づけていますが、この机が食卓にもなって、『川柳雑誌』や、句箋や鉛筆が雑然ところがり、その中にご飯やおかずがあるという、そういう毎日なんです」

「川柳をやりかけると、女中さんにご飯まではこばせ、この机の前で根を生やしてしまうのですよ」

「そのわりに、ええ句ができまへんな」

「七年前に白柳先生から手ほどきをうけたころのことを思うと、なかなか上手になったよ」

と、なかなかご夫婦仲もよろしい。

――真鍮のネジの製作をされているが、今はご子息の社長さんが、もっぱらその面に当り、二男一女のよきご両親として、円満そのものご家庭である。

七年前、白柳氏が宰相山町の町内会の人々に川柳をよびかけ、町内文化向上へ挺身されていた当

川雑　婦人友の会

会員募集

川雑婦人友の会連絡事務所
大阪市南区二ッ井戸町23
山川阿茶

金泥集

課題「才女」

選乃葭生麻

大正の才女雑誌の隅に生き　阿茶
才女誕生クローズアップされる母　同
才走りすぎて及ばぬ才女なり　同　梨花
才女ふと平和な過去をなつかしみ　同
容姿にはふれず才女の筆をほめ　同
妥協又出来ず才女の淋しい目　花代子
手をつけば才女臉をつたうもの　同
親からの老舗才女は守り切り　同
二号には触れず才女も歳をとり　きさ子
才女にも不得手はあった手内職　同
同窓会才女やんちゃな児をつれて　同
十年を病んで才女の読み疲れ　一栄
よろめいた夫へ才女ちとあわて　同
他界して才女のエピソードさわがれる　陽子
マスコミがいつか才女にしてしまい　同
新聞雑誌ラジオと才女めまぐるし　都詩子
才女らしいひらめき見せたクイズ欄　同
ジャーナリストに驅がれ才女縁遠し　美音子
ヒステリーじみて才女の更年期　同
寄附募る役目を才女引受ける　清子
世間から才女にされて肩が凝り　同
女子大出オールドミスのまま終り　女
才女今日五人の遺児を育てあげ　同
青春の恋なく夢もない才女　奈貝子
文壇へ舞台へ才女かけ廻り　同
このひとがと思う才女の市場籠　万女
貧乏の家計に才のない才女　知恵
養老院で才女が貰った文芸賞　悦子
才女振る才女へ陰口遠慮なし　美代
きびきびと才女の話感激し　たつよ
家柄は言わず才女の嫁選び　周甫
才女一人皆んなの話をみな奪い　花奈女
才女と言う名が邪魔をして嫁がれず　白美
お見合へひと時だけの才女ぶり　徳子
才女だが家事に一向闇に合わず　葭乃
才女まだ象牙の塔の夢捨てず

次回題「顔色」〆切五月末日

時、いち早くはせ参じた人たちの中に一栄さんご夫婦や、清子さんもおられたことはいうまでもない。

「各方面の役員をさせられていますので、ヒマがありませんが、私も川柳をしたいのです」

と、ご夫君も川柳には大きい魅力を感じているご様子である。

――句集「私達」を拝見しても、ご姉妹の句はちょっと違うようですね。ご気性も無論ちがうでしょうけど。

「姉のは大らかな句が多く、私のはやはりトゲトゲしいのが多いようです。これは環境もちがいますし、今のところ、姉と私は労資関係にありますし」

と、一栄さんより九つ下の清子さんは、明治36年生れという姉さんの顔を見て、ニッコリするあたり、ご姉妹仲もなかなかよいようである。

――兄弟作家は好郎・梅里両氏がおられますが、姉妹作家というのは珍しいようですね。

「私と清子との間にもう一人妹がいますが、なんとかして川柳をやらせようと思っています」

「薬局へ嫁いでいるのですが、やれば私なんかよりうまい作家になれる素質をもっているように思いますのに」

と、清子さんも三姉妹作家を夢見ているようである。

はなしは余談になるが、筆者の古い友人で「太平洋行進曲」と、いってもすぐ思い出せない人もおられるだろうが、〃海の民なら男なら〃の歌を作った男がある。その妹が、一栄さんご姉妹のその薬局に長い間、務めていたということである。世の中とは狭いな、とおもったことである。

「川柳で苦労していますから、嫁いびりはいたしませんが、息子にいいお嫁さんを、お世話ください」

と、慈愛にこもる美しい眼を細くされる。

「川柳の中で生活しているようで、明けても暮れても川柳、川柳です」

と、ご夫君がアドバイスする。

「お祖母ちゃんは川柳をしていた、と孫たちにも言われたいので句集をのこしておきたいと思っています」

一栄さんの川柳への情熱は一語ごとに燃え、

「路郎先生にゼヒ、〃俺に似よ〃の名句をご揮毫ねがって、わが家の家庭訓としたいとおもっております」

この部屋にかけてある路郎先生の色紙を見上げながら、ふくよかな頬を紅潮さすのである。

ふるくとも僕には仁義礼智信

この名句の下で、われわれ門下はいつ尽きるともわからぬ川柳談に時を忘れていた。

「商売柄のネジを製作するかたわら、せいぜい一句をのこすよう、頭のネジを巻くんだな」とご夫君のユーモアたっぷりの激励のことばをこちらまで頼もしく拝聴したことであった。（不二田一三夫）

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大坂市東区長屋町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

入門講座

研究題「荷物」

清水白柳

ものを書いても何の反響もないのは黙殺されたようで張合いのないものですが、前回のこの講座に対して、投句された方からも柳友からも色々と激励や批判を頂いて有難いと思いました。それが投句のハガキの片すみにでも一寸した意見が書いてあったりしますと、その投句された方と直接話して居るようで温かいものが感じられました。中にはこの投句の作句の動機などを書かれたのもあって大変参考になりました。厚く御礼申上げます。

投句をした場合もそれと同じように、その句がよかったのか悪かったのか、その結果が待ち遠しいものですが、投句のときは入選と没とだけで、何故没になったか知りたい気持があっても、知ることが出来ませんのでそこに何かもやもやとしたものが、残ることが往々あるものです。それでこの講座も成るべく多くの句について、その理由をお互いに研究してゆきたいと思いましたので、一句についての意見をちぢめて、句数を多く採り上げてみました。そのために、ほめられない句の句主名は省略した方がよいかと思いましたが、符号だけをつけました。もし句主名がある方がよければ次から入れますが、この方が無難なように思われます。荷物と母の句ですが、

土産にと荷物背負うて故郷の母　I

何もかも言い切ってしまったという感じのする句でそれだけのことでしかないと言えるようで物足りない句です。

子の顔を見たさの荷物苦にならず　圭井堂

前の句よりはややよいと思われます。それは結語の苦にならずという処に作者の観点があるからです。併し平凡さは免がれないと思います。

故郷の母荷物の様にとどけられ　M

冷たい感じがして頂けない句です。それは母親を荷物のようにと比喩した処にあるのです。とどけたというのも感心しません。

負て連れ荷物へ母もついて来る　周甫

赤ン坊を負うて両手に荷物を提げ乍ら、どうやら歩ける子を連れて実家へ帰る風景はよく見かけますが、母もついてくるの母にあいまいな処があります。その子供の母なのか、子供の祖母なのかがハッキリあらわれていないのがこの句の弱点だと思われます。

学生のチッキは米を本にする　B

米を本だといつわって手荷物にしたなどということは何年か前の時代の出来事のように感じられて、この頃の世相とはいささかズレがあるように思います。同じチッキの句に、

先ぶれのようにチッキが先き帰り　H

がありましたが、着想は一寸面白いのですが先ぶれと先き帰りが、重複していて句が散漫になってしまったようです。先きぶれのようにと説明してしまったのも失敗の一因です。

二度と来ぬ疎開の荷物運ぶ旅　N

戦時中の思い出を何にされたものと思われますがやや時代さく誤的な着想という、感じがいたしました。思い出なれば思い出としての表現法をとらねばいけないと思われます。

家近くなって子供は荷物持ち　K

よくある風景でだれもが経験のあることですから同感出来ますが、それだけにもう着想が古くて詠み古されていますから、新らしい観点に立って世相を見つめて頂くことをのぞみたいと思います。

持て余す荷物を笑う様車過ぎ　J

作句する迄に考えねばならぬことに、句になる素材と句にならない素材があるということです。作者が面白いと感じた出来事や体験も、他人にはありふれた事柄であったりして句にまとめても共感を呼ばない場合が相当あるものです。この句も苦心して作句する素材とは言えません。つまり句にならない着想と言えるようです。

パパ背負いママが荷を持つ疲れ寝の子　K

たどたどしい作句ぶりです。パパ背負いだと荷物とも取れるのでこれはパパが負いとすると、子を負うているのがあらわされますので結語の疲れ寝の子は要らなくなりますから、何かをそこへ持ってくるという風に句を練ってゆくのが作句の練習であります。そうして段々といい句を作って頂くように心掛けてほしいと思います。

トランクで添うて今では立志伝　K

トランク一つで世帯を持ち、共稼ぎから苦労をして今では立派な人物になったということを、立志伝という語に表わすつもりでありましょうがもう一つピッタリしないうらみがあります。それは取ってつけたような、飛躍がすぎた結語が句を硬直させたといえるようです。具体的なものを持って来ますといい句になると思われます。

澄み切った空へキャンプの荷が軽い　豊年

キャンプへ出かける若人の姿が目に見えるように描き出されています。それは荷が軽いという表現

胃潰瘍を内服でなおす
潰瘍の創面に直接働いてニッシェに肉芽を盛り新しい粘膜を新生させ且つ副作用は全然なく胃痛を迅速に和らげます。一回四錠ずつ一日三ー六回使用致します。
メサフィリン
錠　一〇〇錠　七〇〇円　五〇錠　三八〇円
エーザイ株式會社

で、背中一ぱいに負うた大きな荷も喜々として出かける若人たちには苦にならないということがあらわされて居て、この句を生かしていると言えるでしょう。次の句の

荷物みな食べて下山は唄になり　敏子

は荷物をみな食べたという誇張が面白く感じられて成功しているようです。

コンボウの縄を切らさぬ親旦那　八九寸

コンボウは困包で当用漢字にもある筈ですから漢字の方がよいと思います。昆棒と間違われそうですから。丁稚奉公からたたき上げて来た、何事にもよく気のつく商家の親旦那をよく描き出されています。縄を切らさぬのを縄も切らさぬとすると、もう少し句意が深くなるように感じられました。

引越しにしては夜更けに出る荷物　愛鳩

夜逃げ同様の引越しを皮肉っているのですがどこか冷たい感じを受けます。それは傍観者的な作句態度から来ているのではないかと思われるのであります。もう少し温かい眼で見て作句しますと、もっとよい句になると思われる素材であります。

退院の荷物鼻唄でまとめ　一鶴

この句は十六音字ですが何か物足りないような気がしますのは、内容が余りにも単純なために余計そうした感じがするのでしょう荷物と鼻唄の間にを入れると説明的な句になってしまいそうですので、結語のまとめをまとめるとでもするといいのではないかと考えてみました。

写真機は荷物だという趣味のなさ　徹也

酒
清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

一読して句意が汲みとりにくいように思われるのは何処か表現が飛躍しているのではないでしょうか、ハイキングか小旅行にでも出かけるのに、カメラなんか荷物になるから邪魔だというだけの句であって、少し物足りない感じがします。思いつきだけを並べたにすぎないといっては言い過ぎでしょうか、軽い句というものはその奥に何かをひそませていなければいけないのです。

赤ちゃんに嫌われ荷物の方を持ち　敏子

嫁いでいる姉が赤ちゃんを連れて実家へ帰ってくるのを出迎えに行った妹が、一ぺん抱かしてと赤ちゃんを抱いたのはよいが、抱き方が違うと赤ちゃんはむずかるものです。それを赤ちゃんに嫌われと言い取ったところにこの句のよさがあると思います。仲むつまじい姉妹の動作をよく描き出して成功している句であります。

空いていたバスへホッとした荷物　豊年

この句は十六音字で一字足らないのですが読むときは、空いていたバスへ、で切って、ホッとした荷物、と二段に切って読みますと少しも気になりません。少し混んで居てものれない嵩の高い荷物を持って停留所でイライラしながら待って居た乗客の表情が目に見えるようで心温まる作品であります。

道を聞かれそこまで荷物持ってあげ　静水

都会では見ることの出来ない純情な素朴な人間味を感じさせられました。すぐそこですと話しながら持ってあげた荷物を片手に色々と立入った事まで聞きたがる人間のおせっかいな一面までうかがえるようで、よくまとまっています。上五が道を聞かれで六字になっていますがこの字余りは少しも差支えないと思います。

朝の雨傘が荷物になる夕　陽平

軽いタッチで描き出された小品的な表現が佳いと思われました。句の内容は日常茶飯事のことを詠んだので取立てて言う程のことはありませんが、傘を忘れなかったのが面白いと思いました。

童心へ重荷となる見栄捨てたまえ　舟遊

重荷とはさせない学校えらばせる　同

同じ作者の句ですが後の句の重荷とはさせないという語に親心を表わされたのであろうと思われますが、これは重荷にはならぬではないかと考えられます。そうしないと下五のえらばせるが生きて来ないと思います。

前の句は見栄はよく言い取ってあると思います。越境入学か又は有名校を志望するのは本人の意志でなくて、親の見栄がそうさせているのだと鋭く批判していて成功している句であります。

偽善者のようで荷物へ手が伸びず　敏子

老人が重い荷物を持って困っているのか、或は子供連れか何かで荷物を持つのに困って居るのを見て、持ってあげたいな、持ってあげたらどんなに喜ぶだろうと心では思っているのだが、持ってあげましょうという勇気が出ない気の弱さといったものを、ズバリと句にして居られます。偽善者のようでとはいい表現でこの句を生かしていると言えます。

以上の外に人生の重荷を詠んだのが六句ありましたが、どの句も問題にするものを持って居りませんでしたので、採り上げてありません。花嫁の荷物は十句以上も詠まれて居りましたがこれも問題になる句はありませんでした。網棚の荷物を詠んだ句も七句ありましたが、

網棚の荷物夜汽車を眠らせず　生霊

この句がそのうちで夜汽車という具体的なものを持って来たのが目につく位いのものでその他の句はやや低調でありました。

次の研究題を真剣に取組みましょう。

○

次回研究題「権利」
〆切　五月十五日
発表　七月号
宛先　大阪市天王寺区上之宮町一六
清水白柳

雅号由来記

松川杜的（まつかわとてき）

編集子から通知を受けてはたと困つてしまいました。というのは他でもありません。私の雅号には恥かしい話ですが皆さんのようにこれといつて意味が無いからです。強いて申しますならば、私が川柳を習いかけた頃、句会に出席するのに何か本名では拙いと思つていました所、二三の柳友が私が非常にトマトの好きなところから「杜的」にしろと言う訳で杜的と名乗つたような訳です。当字に的の字を使つたのは先輩方的さんの雅号から思い付いてくれたものと思つています。然し呼名の際などやや言い難い点もあり、変々改称しようしようと思いながらずるずる来だに使つております。…生来の鈍感と不勉強のため柳歴に恥かしいような句ばかり作つています。この際思い切つて号でも変え心機一転四十の手習でもありませんが柳道に突進したく思つておりますが？　私の力量ではねー

（左から路郎・酉乃両先生・梅里氏ーすゝむ氏撮影）

大萬川柳
九周年記念大会

春は大万川柳から——毎年三月には大万の川柳大会がある。ながい冬眠から春の息吹きを感じる季節で、大万の大会が来ると、

——もう春だな。と、心も装いも明るくなるのである。

所はご存知松崎町の大万。ときは3月27日——朝は雨があったが、会が開幕するころには、階上の広間はやわらかい春光に包まれ、大会気分が盛り上ってくるのである。

司会　西尾　栞
開会の辞　川村好郎
祝辞　北川春巣
挨拶　松江梅里
柳話　麻生路郎
閉会の辞　須崎豆秋

というデラックスな雅号がならぶところや、宴会部会員と自称される毎日放送の岩崎愛二氏のご出席等、大万カラーは横溢する。

きょうの選者である西村梨里前編集長は、ご家庭の都合で、岡山の木山遠二氏はこれものっぴきならぬ事情でともに欠席されたが、遠来石川県小松支部の関戸宗太郎氏はじめ、兼・席題の選者群は、一年間苦吟の末、やっとかち得た光栄の選者室に勢ぞろいした。

過去九年間を通じて、この日の選者群ほどフレッシュな感じを与えた大会は、かつてなかったのではないか。

新人台頭——これは大きな進歩であり、わが「川柳雑誌」が進むたくましい姿でもある。そこに聞く〝いのちある句〟への力強い足音こそ、柳界の行進譜（ふ）でもある。

路郎先生は柳話のなかで、大万川柳の隆盛に祝福を送られたが、川柳塔にヤヤがつづかぬよう警告された。自他ともに許す最高峰「川柳塔」は、毎月毎月佳句を積み重ね、より高い川柳塔を築きあげねばならない義務がわれわれに課せられ

川柳不朽洞会（五月現在）

指導
麻生路郎

賛助
長谷川一徹　戸田古方
中田守雄　西尾栞
白川朋吉　市場没食子
中村祐吉　土井文蝶
田中辰二　若木多久志
岩崎愛二　川村好郎
中村直勝　正木水客
麻生磯次　黒川紫香
井上吉次郎　丸尾潮花
島浦精二　小西無鬼
恒藤恭　西いわを
田村孝之介　八木摩天郎
山本雨迷　武部香林
山路閑古　北川春巣
柴谷宰二郎
麻生葭乃
橋本緑雨
高鷲亜鈍
沢田四郎作
東野大八
速水真珠洞
中島紫痴郎

洞友

—継持会員—
寺井鋭々　太田良子
古川魔花麗　直原七面山
前山北海　西森花村
三輪晩翠　河村日満
大坂形水　足立春雄
井上湧三　榎南夏六
西垣錦風　石川侃流洞
築山快夢起　安岡珊枝郎
市岡暁舟　佐野卜占
白砂旋風　小沢史葉
藤本満年　牟田一哲
須崎豆秋　河村瑞川
羽佐間柳葉　木村千容
福田妄夢　山口秋花
尾崎方正　野本呑水
吉田圭井堂　小林文月
菊沢小松園　亀山晴峯
浜田久米雄　山根白星
桜川不水　冨岡淡舟
布施筑川　飯降白香
石井白面人　西辻竹青
大西迷窓　林野甦光
有働菜春　木口賀峰
石曽根民郎　平尾太希志
石田良子　後藤梅志
直原七面山　佐野白水
西森花村　真鍋一瓢
河村日満　福田丁路
足立春雄　木村水堂
榎南夏六　野村味平
石川侃流洞　田垣方大
安岡珊枝郎　小沢史葉
佐野卜占　牟田一哲
増田耕民　河村瑞川
杉谷湖山　木村千容
弘津柳慶　山口秋花
水谷竹荘　野本呑水
尼緑之助　小林文月
新川博也　亀山晴峯
徳永雅美　山根白星
—正会員—
吉田水車　冨岡淡舟
大西八歩　飯降白香
若林草右　西辻竹青
長谷川三司　林野甦光
大森娯句楽　木口賀峰
服部十九平　平尾太希志
青木遊星　後藤梅志
福島鉄児　佐野白水
黄瀬美秋　真鍋一瓢
岸阿万南柳　福田丁路
阿万的　山根白星
小西雄々　冨岡淡舟
菊田いさむ　飯降白香
山川阿茶　西辻竹青
岩崎一伸　林野甦光
金井文秋　木口賀峰
伊藤茶仏　平尾太希志
那谷光郎　後藤梅志
佐野白水
真鍋一瓢
福田丁路
木村水堂
野村味平
田垣方大
野本呑水
小林文月
亀山晴峯
山根白星
冨岡淡舟
飯降白香
西辻竹青
林野甦光
木口賀峰
平尾太希志

ているのである。

きょうの総合得点では不二田一三夫氏が第一位になった。（F）

兼題「トップ」　松江梅里選

トップモード彼氏のてれるランデブー　舟遊
野次馬のトップホースの水を浴び　きさ子
トップモード鶯を聞く顔になり　水客

兼題「感激」　西川晃選

無駄骨と見ていてくれる眼を見つけ　水客
感激の最高頂に欠伸が出　亜鈍
感激の唯吐く息とすう息と　徹也

兼題「極め手」　不二田一三夫選

妥協さす極め手の言葉ちらつかせ　牧人
邪魔者が這入り極め手を出しそこね　南宗
知恵借りた極め手は頼りなく思い　恒明

兼題「花形」　橘高薫風子選

グループの花形筆も弁も立ち　牧人
花形はチョカチョカして叱られる　栞
花形も落目と知れる金を貯め　無閑

兼題「桜吹雪」　早川清生選

桜吹雪売家の庭をかざる気　宏子
分教場さくら散るなかに人が居ず　水客
桜吹雪茶店は安いものが売れ　凡茶

席題「待つ身」　内藤きさ子選

待つ身になっとくれやすとまた電話　恒明
馳けつけた顔へ待つ身の愚痴も出ず　梅里
待つ身また郵便受をのぞきに来　菁風

席題「女傑」　山川阿茶選

女傑の瞳うるんで春の空になり　水客
ジャーナリズムも一目おいている女傑　庸佑
おだやかに話して御寮さんよい度胸　栞

席題「泣き寝入り」正本水客選（西村梨里氏欠席）

警察が信用ならぬ泣き寝入り　晃
泣き寝入り知れて始末書かかされる　阿茶
泣き寝入りする気の心晴れてくる　舟遊

席題「指名」　北川春巣選（木山遠二氏欠席）

煙草もみ消して指名に逆らう気　水客
うるさ型委員指名を断らず　好郎
指名手配風呂屋の壁もぬくうなし　凡茶

席題「男同士」　関戸宗太郎選

春の雨男同士のあほらしさ　好郎
胸たたくだけで通じる男の血　一三夫
男同士クスリの話飲む話　葉光

（天地人だけ発表）

不朽洞会員のシンボル

美しい

バッジ

一個二〇〇円
送料　八円

申込所

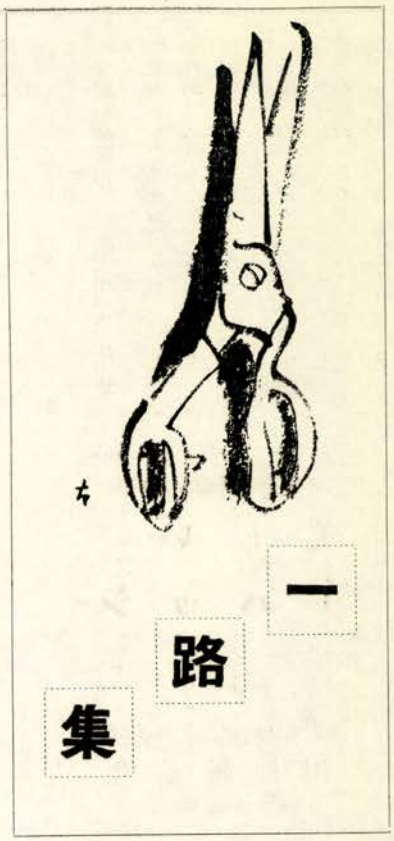
大阪市住吉区万代西5の25

川柳雑誌社

（振替口座大阪 75050番）

田村藤波　池田古心
岡田夜潮　石居高志
臼井三林坊　三村柳風子
稲葉鳩花　小倉へとち
下山清潮　早川清生
本田恵二朗　武部若菜
松川杜的　西出一栄
馬場夢生　酒田清子
村上ゆづる　平井井平
森本法泉子　阿部柳太
小池しげお　西田柳宏子
竹内圭三　辻圭水
松村万古　松岡委滄浪
藤井春日　中松恒雄
津田麦太楼　杉本辰一
浜野奇童　安部立美
橋本幸男　野口迷羊
高崎雄声　児島与呂志
高橋操子　中島小石
藤井明朗　野々口美舟
永松東岸　飯田乃文夫
野田素身郎　加納山茶花
永藤弥平　水野水茶
神谷凡九郎　小浜牧人
清水望峰　菱田満秋
川端鬼酔　前川左文字
木村十悟　池上知恵美
伊達堰子　岡部三十郎
坂田東洋男　西尾青一路
志水礼司　橘高薫風子
不二田一三夫　中村九呂平
酒井ひか平　北村三歩
長尾越鳥　山田伊三男
深見雅堂　多田ほなみ
松下京一楼　傍島静馬
津秋六花　木山遠二
丸川初甫　池戸桃村
戸田喜楽　石坂新雪
笹野旭泉子　城内吾柳
新岡回天子　西川晃

梅木宗一　槙村客遊子
田中蛙眠子　宗高矢寸志
野田一念　河井庸佑
山本立児　小島さぎす
林葵丘　藤村〆女
仲どんたく　田中烏雀
久家代仕男　谷沢好祐
本多柳志　高津徹也
原独仙　槇紫光
大谷月都　工藤甲吉
江国幽谷　門永三舟
光好陽子　伊原明林
徳永鬼美　藤村梨花
河相すゝむ　富永柳洋
野呂鵜汀　梶谷冬生
櫂口舟遊　小林孤呂二
高野むじな　舟木与根一
辻白溪子　室田千尋
吉原紅月　鳥本泰
竹内千里　林夢虹
石倉旅風　本菁風
魚住満潮　山本一傘
田中狂二　杉前南宗
林昌男　村上旭童
福田多可志　前鳴恍
森田若人　岡嶋芳道
西尾青一路　北村三歩
橘高薫風子　米虫一乃字
西尾青一路　多田ほなみ
坂田東洋男　山田伊三男
岡部三十郎　傍島静馬
伊達堰子　木山遠二
木村十悟　池戸桃村
川端鬼酔　石坂新雪
前川左文字　城内吾柳
菱田満秋　西川晃
清水望峰　
神谷凡九郎　
永藤弥平　
野田素身郎　
永松東岸　
加納山茶花　
水野水茶　
小浜牧人　



下手

友淵貴山選

落款に下手と言わせぬハクがあり　弘道
下手でも宜ろし名士表装をされ　万女
借用証下手でも良いと書かされる　秋月
下手糞の歯医者達者な歯をつつき　周甫
下手な字ですまんが寄書またも書き　不村
下手な事言うて謝罪にょう行かず　北海坊
算盤の構えで下手と見破られ　敏子
下手な字をつくづくうらむラブレター　吉備郎
晩酌にふれずやりくり下手と云う　菜春
下手な字の額も名士だから掲げ　光郎
味付けが下手だとズバリ云える仲　徹也
下手に見せよう代筆にする苦心　八九寸
下手に手が出せぬ女にある魅力　宗太郎
下手な字で祝儀と書いて喜ばれ　鵜汀
下手床屋兼業は鋸の目立なり　定月
下手くそな話上手にきいてくれ　木魚
口下手の為に誠実割引かれ　尉介
口下手に来られ同情してしまい　敏明
下手くそな注射やめてとも云えず　一鶴
下手な字の小切手拝んでからしまい　梢月
これ持って行けと名刺に下手な文字　静水
口下手が先ず一番にほれられる　どんたく
寄附集め記帳にまわる口の下手　隆史
下手くそな辯に女を撮りたがり　伊津志
演説が下手で市長を三期なり　渋柿
大臣の下手な字借用証に残り　葵丘
他家のめし食べぬ職人腕が落ち　孝風
口下手の姉妹にまかす恋　兼治郎
下手くそな字で来る恋を嬉しがり　一休
口下手の正直だけが只取柄　繁太郎
口下手が弁論会で優勝し　たけお
外交の下手日本の危機となり　保夫
下手な字で通り代書が繁盛し　甦光
正論が口下手故に葬られ　吉枝
先生に下手といわれて下手となり　夜潮
下手に動くと動きのとれぬ世智辛さ　豊年
下手だ下手だに研究心むしりとり　庸佑
臆面もなく下手な字で来る無心　蜻蛉
下手ながら習い通してきた根気　南宗
正直を売物にする社交下手　仁智坊
麻雀もゴルフも下手で出世せず　十九平
下手なりに賀状は墨で書いてよし　愛鳩
横好きと我が才能を自認する　むじな
何もかも下手で上手な口答え　祥月
口下手も上手もまじる選挙戦　雪美
又もとの話になった話下手　涼人
口下手が恋のチャンスを取り逃し　花美
算盤の下手は読み手にばかりなり　代仕男
下手だから上手になるさと母やさし　市郎
下手でつせと云うて立派にやるつもり　全信
口下手も彼女をくどくよいしやべり　昭
大臣の小唄下手でも三味に乗り　旭峯
へぼ将棋手駒どっさり手に握り　生薑
肩書へ望めばこんな下手な筆　古心
下手くその喉うならせるお湯加減　雪峰
下手なこと言うてしまった酒の酔い　雄声
下手やけど頑丈に出来ている垣根　蘭
下手な字も信者へ光るお筆先　和三郎
ふくれるか泣くかで下手を自認せず　ひか平
なにやらの横好きやらと皮肉られ　弘村

佳句

口下手があっさり縁談まとめて来　初甫
特色があるとは下手を隠されて　南牛史
交際が下手で出世欲持たず　雄々
何しても下手な男の子沢山　鎮海
口下手も座り込みには賛成し　山椒坊
税金の督促下手な表書き　南天
始末書へ悪筆一層恐縮し　井蛙
下手ばかりして一生がまだ終えず　藤波
心得て下手な話にうまく寝る　吸江
口下手に笑くぼがあって救われる　恵二朗

五客

衣食足って習う小唄の下手なこと　圭井堂
秘書の風邪小切手下手な文字で来る　昌男
人の下手笑えぬ余興の順がくる　尚史
口下手の舌を噛みきりそうな嘘　卯之助
下手でよし上手をあこで使う地位　圭水

人

下手くそな職人派手な貼り薬　秀峰

地

口下手になるほど氷き孤独にて　晃康

天

靴一つ履いても下手なちぐりとう　淀月

軸

二代目の下手は恨んでばかり親

少女

弘津柳慶選

ピンと来る少女で母を困らせる　半休
お下げ髪日記伏字の日が続き　弘道
清潔な匂残して少女去り　不村
指切りで少女に固い約が出来　光郎
振袖の少女の花束軽く受け　初甫
少女歌劇乳房たるんだのもまじり　宗太郎
眼の見えぬ少女へ春の庭を開け　鵜汀

制服を脱げば少女も大人びて　吉備郎
イミテーション下げて少女の趣味が見え　敏子
少女のころのあれが初恋だったのか　陽子
人形がこわれて少女涙ぐみ　幽谷
少女もうボーイフレンド尻に敷き　どんたく
花売の少女が悲しい瞳もち　葵丘
マッハ族少女と夫婦気取りなり　孝風
鍵かける秘密を少女持っており　兼治郎
憧がれの東京少女を裸にし　井蛙
アルバムに納めて少女保存され　藤波
演出はリボン一つで少女にし　淀月
四つ身でもう身に合わぬ女の子　夜潮
孝行の金釘流がみな泣かせ　千里
人形と一緒に少女入院し　夢虹
返答が少女と思えぬ調室　尚史
お下げ髪してる少女の純な恋　卯之助
純真な瞳そのまま少女伸び　豊年
ひばり自身少女時代をなつかしみ　蜻蛉
スターのサインを少女宝の様に見せ　むじな
少女もう父を異性として眺め　愛鳩
宝塚壁に貼ってるおさげ髪　涼人
少年に負けぬ少女のませた口に負け　吸江
うぶ毛光る少女の頬の片えくぼ　花美
感傷の過剰が少女をまた泣かせ　十九平
マネキンへ少女の視線動かない　旭峯
思い出は少女の頃の手毬唄　雄声
オカッパへそろそろパーマ当てたがり　蘭
合格へ少女は肩をたたき合い　雪峰
思い出の少女期狭い箱の中　恵二朗
少女の瞳母の不正を許さない　ひか平
パパと風呂入らぬ娘に成長し　弘村
少女には大人の世界がきたなすぎ　雄々
少女が不倫の恋にけつまずき　定月

五　客

抽斗に少女の秘密多すぎる　昌男
浴衣もう少女ではない線を見せ　万女
千羽鶴折って少女は病み続け　市郎
おじさんが好きと少女におそかされ　一鶴
マスコミにおしつぶされた少女歌手　庸佑

人

看護婦も制服ぬげばまだ少女　秋月

地

舞いおえて少女少女の顔になり　静水

天

姫百合の塔永遠の悲歌きこえ　どんたく

軸

炭坑の少女いじけた瞳で生きて

ニコヨン

吉田圭井堂選

ニコヨンの帰りはずんだ足になり　祥月
ツギにツギあててニコヨン春仕度　仁智坊
ニコヨンになっても都落ちはせず　可住
百姓の慈雨ニコヨンに済まぬ雨　忠三
保護者欄職業ニコヨンとは書けず　南天
ニコヨンに道よけさせて観光バス　万女
金貸しに返しニコヨンあとは飲み　敏子
ニコヨンも一票があり総選挙　不村
オートメがまたニコヨンを増加させ　徹也
子の寝顔母ニコヨンも苦にならず　敏明
十円の貸借ニコヨン殺気立ち　弘道
職安の窓ニコヨンのこけた頬　忠太朗
ニコヨンの微笑真面目に生きる幸　隆史
乞食にもなれずニコヨン血を売って　孝風
ニコヨンの馴れぬ手つきを労われ　藤波
ニコヨンの元将軍へ来るマイク　昌男
ニコヨンへ女らしさを見失い　一休
インテリのニコヨン同志あぶれて居　淀月
ニコヨンの弁当がらが歩調取り　夜潮
年度末ニコヨンが又掴りかえし　尚史
歌詠みも居るとニコヨン威張るなり　一ン十
ニコヨンに背広を借りる用が出来　愛鳩
ニコヨンが昼の目刺しを笑い合い　代仕男
ニコヨンを除けて神風徐行する　半休
ニコヨンであって絵もかき詩もよみ　全信
ニコヨンの昼三面にはなが咲き　雪峰
ニコヨンの仕事振り批判する炬燵　和三郎
手相観るニコヨン休憩忙がしく　八九寸
ニコヨンも子の秀才へ見直され　秀峰
ニコヨンが自慢で見せる登り竜　定月
ニコヨンにまかせておれぬ道普請　宗太郎
朝の改札ニコヨン隊に待たされる　初甫
ニコヨンになってきれいな詩を作り　鎮海
ニコヨンの焚火仕事の内に入れ　山椒坊
人生だよとニコヨン自負すてず　静水
ニコヨンもいいな桜の道普請　どんたく
ニコヨンの今日も生きぬく地下足袋をはく　房子
かえり道ニコヨンやっぱり火を囲み　一鶴
ニコヨンと見えぬ物腰過去を秘め　梢月
ニコヨンに化けて刑事の目が光る　秋月
ニコヨンで生き抜いて来た十二貫　ひか平
ニコヨンをさんづけで呼ぶ選挙前　伊津志
自動車の中からニコヨン数えられ　渋柿
開き込みでニコヨン風が浮いて来る　庸佑
ニコヨンの自慢象牙のパイプ見せ　雄声
ニコヨンも切符持ってる坐りよう　木魚
ニコヨンに負けた安定所のチーム　伊津志
ニコヨンはニコヨンだけの荷を運び　たけお
ニコヨンへ労働貴族振り向かず　十九平
ニコヨンの先輩抜目なくさぼり　南牛史
ニコヨンの変死三面の隅の隅　圭太
酎のめばニコヨン総理ほどしゃべり　雄々
憲法のうそへニコヨン立ち上がり　葵丘

佳

税務署へニコヨン行ってみとうなり　幽谷
ニコヨンの女が母にかえる雨　陽子
ニコヨンのせきもあわてもせぬ動き　晃康
トロを押す寡婦に誓いの子が育ち　光郎
ニコヨンの母を恥じない綴り方　井蛙
ニコヨンへ照る日曇る日まならず　恵二朗

人

ニコヨンにダウ千円がピンと来ず　豊年

地

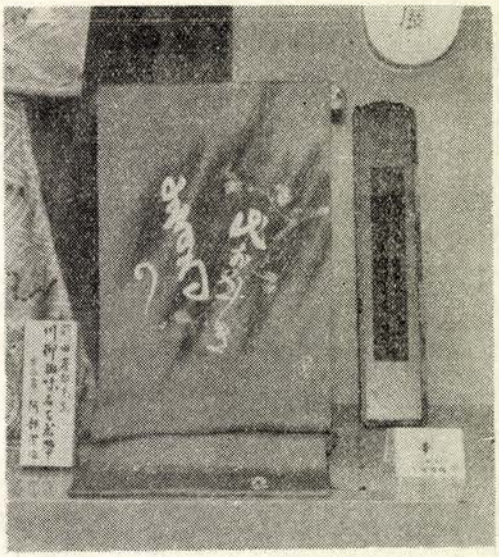
ニコヨンの方が素直に買うた羽根　実男

天

ニコヨンの老婆へ土を控えとき　鵜汀

川柳雑誌社特製
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）八円

柳界展望



既報の三越商品展（東京）へ出品された川柳趣味の名古屋帯。
句「春の雨このお座敷の外へ降り」故前田窟郎氏
出品者　阿部佐保蘭氏

句会

▼恒例本社「川柳まつり」は五月十五日(日)に繰上げ午後一時から宝塚阪急旅行会館で開催される。この機会に各地の柳人の方々も多数参加の上交歓ありたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)は四月十九日（火）午後八時から南区三休橋南詰生々庵居で開催。▼大阪逓信病院川柳会は四月二十三日（土）午後二時から五階会議室で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は四月二十八日（木）午後六時から難波の親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は四月二十九日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼葦川柳会（島根県）四月句会は藤井章道氏全快送別句会を兼ねて二十三日午後六時から、国立島根療養所本館和室で開催。▼羽曳野病院どんぐり句会（羽曳野市）は四月三日（日）午前十一時から葭乃女史出席のもとに院内講堂で開催。▼愛鋼川柳会（愛知県）は三月二十五日形原温泉吟行会を開催。▼川雑下関支部親桜句会は四月十日福王禅寺で開催。▼川雑備前支部句会は四月十日浜田久米雄居で開催。▼愛媛春の川柳大会は四月十日松山市ＰＴＡ会館で開催、約百名の出席者があり盛会であった。▼豊中川柳会（豊中市）花見の会は四月十日服部緑地で開催。▼第十一回新潟県下川柳大会は六月十二日（日）午前九時三十分から新津市日宝町青年研修所ホールで開催。雑詠選者別に二句以内、選者は川上三太郎・後藤閑人・金子呑風・江原たつ路・三浦涼秋・大野風柳の諸氏、投句は百円封入の上五月末日までに新津市柳都川柳社内大会事務局宛。▼第十四回長野県川柳大会は五月十五日(日)午前十時から松本市中原町長野県護国神社内美須須会館で開催。兼題、座蒲団・城・紐・総出・歴史男・各題三句以内、投句は五月十日までに百円同封の上松本市大名町しなの川柳社内長野県川柳大会宛。▼西日本新聞社・長崎川柳協会主催、近県川柳大会は五月二十二日（日）雲仙国民ホテルで開催。兼題、展望・ゴルフ・ＰＲ・紅白・有料道路、各題三句、投句は百円封入の上五月五日までに長崎市平戸小屋町二〇鳥巣幸柳宛。▼噴煙十周年記念の自選句集「草千里」作品が募集されている。自選句十句（新作旧作を問わず）住所氏名職業生年月日を明記の上七月十日までに参加費二百円を封入の上熊本局私書函45号句集「草千里」刊行委員会宛。

句集・柳誌創刊

▼浜夢助（仙台市）著川柳「をぐるま」が昭和三十五年三月二十五日仙台市小田原泉丁五川柳宮城野社から発行された。Ｂ６版一七七頁、頒価三百円。▼梶川蘇堂（西宮市）著句集「かさゝぎ」が西宮市池田町四七梶川蘇堂氏方から発行された。Ｂ６版八八頁。▼「川柳ちまた」一号が四月一日に川柳ちまた発行所（東京都港区芝浦一ノ一五関口方）から創刊された。

消息

▼橋本緑雨氏（大阪市）は社団法人大阪市電交助会を定年退職された。明治四十四年五月交通局に就職、昭和二十四年四月から交助会創立準備委員として引続き勤務、四十九年間の足跡をのこされた。▼高田抱逸氏(大牟田市)から、三池の山村ではストの暇を見て、ハチマキ姿で梅の花見酒、焼酎でホロ酔の炭坑マンの元気は大資本三井を吹飛ばす意気で大言壮語を吐いていますと。▼武部香林氏夫妻（岡山市）は三月二十六日住み馴れた大阪と別れ岡山市へ帰郷された。岡山駅では久米雄氏らにかかえられてプラット・ホームに下りられた由。県庁のミュージック・サイレンをふる里の母の懐に温く迎えられたように聞いておられると。▼梶川蘇堂氏（西宮市）は夫人同伴で東北方面を廻遊、三月二十八日は仙台、石巻、網地島を見物され、「椿あかあか裏は鶯が頻り」の句信を寄せられた。▼野村味平氏（加賀市）は今年の川柳まつりには伊藤茶仏氏と共に出席したいと思うが、最近日曜日になると疲れが出て、寝込んでしまうのが癖になり、今から気持を引立てていますと。▼堀風船堂氏（大阪市）は三月二十四日長崎に遊ばれ

予約申込募集

予約〆切35年五月十五日限

山村祐著

短詩私論

銀色題字厚表紙上製本
B6判約二〇〇頁

内容
第一部　川柳私論
第二部　川柳私論以後

さきに「天馬叢書」IIとして刊行され、非常に好評を拍した「川柳私論」は絶版となったのちも、入手希望が絶えないので、ここにその後の諸論稿と共に「短詩私論」として刊行されることになりました。予約〆切後は定価となりますから即刻申込んで下さい。

定価　280円
予約　200円
送費　32円

予約申込所　東京都豊島区巣鴨六丁目一三二九番地
発行所　森林書房
振替口座　東京八三二〇〇番
電話東京九八二局七七〇〇番

たが、長崎には美人が見当りません。やはり美人は大阪に限りますと、寄信があった。▼阿万万的氏（大阪市）は国鉄大阪変電区に転勤。▼市場没食子氏（大阪市）は四月六日薬学会に出席の為め上京、学会終了後、カネ女と同伴、長野善光寺に参詣され、戸倉上山田温泉に一泊、名古屋経由で帰阪された。▼東野大八氏（美濃加茂市）は四月二日同志四十名と岐阜タイムス社を退社、岐阜民友新聞の五月創刊を目指し創立活動をはじめられたと。▼槇紫光氏（愛媛県）は四月十日松山春の川柳大会で最優秀の成績をおさめられ、知事杯を獲得された。▼西いわを氏（大阪市）は四月五日浜松へ出張、「浜名湖も春の霞に包まれて」の句信を寄せられた。▼洲船明雄氏（加賀市）は三月十日九年間の斗病生活に終りを告げて、石川療養所を治癒退所された。▼若本多久志氏（西宮市）は従来の会社の外に新会社の創立準備のため、上京、その外多忙を極めていられる由。▼川端鬼酔氏（大阪市）は四月、スタンド「万福」を住吉警察署北隣角で開店された。▼川雑名古屋支部は四月十七日役員を改選、新支部長に野田一念氏、編集部に神原文鳥氏、近藤いさむ氏、会計に藤沢不二郎氏が就任された。▼山田季貴氏（広島県）は三月二十八日国鉄広島地方資材部需給課に転勤、多忙を極めて居られるが、去る一月全快した黄疸が再発、通院しながら勤務に励んで居られる由。

どんぐり川柳会大会（鳴尾野市）麻生葭乃女史（中央）川村好郎講師（その左）

弔

▼西村梨里さん（河内市）の岳父諦氏は三月二十六日午後十時胃癌のため、河内市本庄の自邸で死去。葬儀は二十九日午後二時から浄福寺で行われた。謹悼。▼辻川喜仙氏（大阪市）長男喜作氏は胃癌のため大阪市大附属病院で入院加療中、三月二十五日午前零時死去。年三十六。謹悼。

転居

▼井上恵世氏（稲沢市）は愛知県稲沢市長束一〇〇稲沢公団住宅十六ノ十二へ転居。▼水田帆舟氏（東京都）は東京都板橋区大谷口北町一六鈴蘭荘へ転居。▼阿万万的氏（大阪市）は大淀区中津南通二ノ五国鉄梅田宿舎三の二へ転居。▼武部香林・若菜夫妻（岡山市）は岡山市門田屋敷一二二へ転居。▼浜田久米雄氏（岡山市）は岡山市三門鉄道宿舎十七号ノ二へ転居。▼井西琢治氏は四月十六日左記へ転居された。金沢市泉野町ヨ五八ノ三笹木由男方。▼高峰柳児（北沢袈裟雄）氏は長野県小県郡丸子町昭和倉株式会社丸子支店へ栄転された。

電話開通

▼木田恵二朗氏（児島市）の宅に電話が開通した。児島九三三四番。▼木口賀峰氏（吹田市）の宅に電話開通。大阪㊳局七五一〇番。

改号

▼富永夢路氏（相生市）は柳洋と改号された。（薫）

不朽洞会から

常任理事会—四月十六日（土）午后七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院階上で開催された。

議事は理事長選任に関し、路郎先生から常任理事会の意見を参考にしたいから聞かして欲しいとの事故、きたんのない意見を交換して回答し、病臥中の先生から新理事長は生々庵氏とするむねの発表があり副理事長は二三日の内に決定することにして九時すぎ散会した。出席者、生々庵、春巣、栞、好郎、多久志、梅里、古方、没食子、紫香、竹荘、薫風子の諸氏。

★新理事長、新副理事長左の通り決定。理事長—中島生々庵氏、副理事長—若本多久志氏、同—松江梅里氏。

★前理事長土井文蝶氏は二期に入って病魔の襲うところとなり、理事長を辞任されることになったので、前述の新スタッフによって、一層本会の発展を期することとなった。

正誤

▼前号三頁目次七行目「大阪の宿」とあるは「大阪の酒」に付き訂正。

▼前号三四頁三段四行目「もう次の」の句主は蘭氏の作、そのつぎの句「駅までは」は古心氏の作に付き訂正。

若本多久志著　麻生路郎序　好評嘖々

川柳　親ごころ子心

価 150円
送費24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義な書である。

大阪市住吉区万代西五ノ二五
川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇

花地物壇

いのちある句を創れ

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 四月句会（大阪市）

4月7日 午後6時

会場 未生会館

春の西陽をまともに受けた会場の大広間は、明かるく感じよく、三方の窓が三面鏡のようだ。

路郎先生は風邪で大事をふんで欠席されたが、生々庵副主幹以下〝いのちある句〟へ挑む精進はおさおさ怠らずというハリキリかたである。

句評の清水白柳氏は、ご家族の病人のことを心にかけながらも、きょう責任出席されたのである。——14ページ参照。

女流作家のご出席が相当多く、会場に花が咲いたようである。

不朽洞賞男、菁風氏がまたまた名句一輪、四月の花となる。さあ、来月はいよいよ待望の川柳まつりだ。（F）

出席者—葭乃・一三夫・宏子・舟遊・圭井堂・紫香・水堂・摩天郎・鎮海・いさむ・満秋・一ン十・東天紅・静馬・旅風・悦子・三司・一瓢・与呂志・柳志・古方・酔升・牧人・梅里・井平・和楽・武助・十悟・鳩花・裕邦・瑞歩・文秋・薫風子・徹也・菁風・すゝむ・一栄・清子・柳宏子・正一・増治郎・〆女・生々庵・永香・竹荘・繁雄・多久志・高志・庸佑・貴山・白柳・水京・保美・とも子・吸江・堰子・晃・涼秀・淡舟・南宗・奈良子・阿茶・紡毛・吉備郎・栞・

兼題「黒」 麻生路郎選

黒枠へ敵も 叙勲へ 費成し 一三夫
従容としとれば黒ときめられる 一 瓢
喪服の黒うなじの白さも痛々し 与呂志
十五のタドンがずらり新 記 録 圭井堂
民主主義皮膚の黒さをまだ論じ 香 林
黒とれば黒もお似合いですとほめ 酔 升
黒似合うひとで世間が捨ておかず 弘 村
黒痣に仲人おそるおそる 触 れ 阿 茶
計理士にたのんで黒を赤にする 豆 秋
六感は黒刑事室パッと散り 多久志
黒ん坊連れて校庭小そう立ち 圭井堂
国宝の黒く汚れて 拝 まれる 牧 人
黒を着た女妖しく見える夜 清 子
ダイス振るマダムの指の黒ダイヤ 三 司
黒幕がいてロボットはしゃべるだけ 一三夫
お悔みが喪服姿にみとれとり 一ン十
鼻梁きいたか黒が白になり 敏 明
よごれ目の少ない黒を買う貧乏 舟 遊
鼻かめば鼻の黒さも大阪や 薫風子
黒い瞳が港の雨にぬれて立ち 花乃子
黒石で受けて一対一で辞し 一 鶴
黒雲をくぐって月の汚れなし 花 村
黒一点を凝視めて生くる 亜 鈍
よろこびへ墨の黒さを確かめる 旅 風
黒眼鏡凄味利かしたつもりなり 静 馬
母も髪染めて受験期待ちかまえ 水 客
黒靴をわざわざ買うて式を挙げ 菁 風

兼題「待ちぼけ」 戸田古方選

待ちぼけへ代人からの詫び電話 八九寸
待ちぼうけくずれるように横になり 阿 茶
待ちぼけの視線は春の水溜り 水 客
待ちぼけの顔へネオンのいそがしく 東天紅
向う側へ立って見ている待ちぼうけ 柳 志
ひげ剃ってネクタイ代えて待ちぼうけ 美 子
言葉尻思い当った待ちぼうけ 文 秋
待ちぼうけ果物店も閉めはじめ 旅 風
もう五分もう十分と待ちぼうけ 旅 風
女房はいいなと思う待ちぼうけ 水 堂
待ちぼうけ幹事割勘気にかかり 正 一
待ちぼうけの客へ女中はお茶をかえ 東天紅
炭坑節うたって帰る待ちぼうけ 旅 風
待ちぼけの駅一人散り二人散り 紫 香
待ちぼうけよその女がきれいなり 多久志
あきらめたあとへ来そうな待ちぼうけ 梅 里
待たす気で待つを覚悟で来いと言い 裕 邦
待ちぼけてやっと残った電車賃 白 柳
電話ではもう出たと言う待ちぼうけ 生 蓋
待ち呆け四月馬鹿とは知らなんだ 梅 里
待ちぼうけマダム手酌で飲みつぶれ 一 鶴
二度三度指切りをした待ちぼうけ 吸 江
まるかったナーと気づいた待ち呆け 十 悟
週刊誌の画ばかり見てる待ちぼうけ 保 美
待ち呆けが突然マイクで呼び出され 淡 舟
待ちぼけ時計のネジはもうまけず 満 秋
待ちぼうけ不吉な予感ばかりして 梅 里
野良犬と仲良くなった待ちぼうけ 柳 志
待ちぼけの前で自動車事故が起き 紫 香
顔見たら待ちくたびれたとは言わず 与呂志
伝言板に書いてあるのに待ちぼうけ 文 秋
待ちぼけをさせてすまんと言ったきり 摩天郎
夢みたい今日もたのしい待ちぼうけ 繁 雄
待ちぼうけ風邪の薬を買うて去に 鎮 海
ころっと忘れられていた待ちぼうけ 晃
待ちぼうけ相手は良寛さんでした 古 方

兼題「用心」 黒川紫香選

用心の犬がデートで家を空け 山椒坊
用心棒利かす時刻を酔いつぶれ 八九寸
用心が過ぎてひ弱な子に育て 牧 人
用心をしいしい仲居少し酔い 三 司
用心をして真先きに風邪をひき 奈良子
用心に飲んだ薬で胃をこわし 井 平
用心をした台風はそれてゆき 梅 里
大臣の用心深く答弁し 水 京
さりげなく紙幣を数える向きを変え 水 客
用心に持たせた傘を忘れて来 与呂志
用心をしてておんなじ手にかかり 晃
危いと見たか女はついてこず 南 宗
一番の用心者が先ずかかり すゝむ
ネストンを持って二次会ついて行き 柳 志
用心のまだどこやらがもの足らず 古 方
用心に飼うた雑種は寝てばかり 牧 人

泥棒が不用心な家やなと入り込み　与呂志
錠二つつけて自転車新しい　高志
用心に信号迄は連れて行き　永香
戸締りをして我が家を出る空巣　南宗
うますぎる話へ用心してかかり　牧人
用心に分けた財布を盗られてき　水客
今度こそ用心したに酔いつぶれ　生々庵
さりげない顔で用心するマダム　正一
食い物に用心深いやせっぽち　いさむ
懐中を用心する程持っていず　東天紅
金入れたハンドバッグは手放さず　一栄
用心に飼ってる犬にかみつかれ　庸佑
銀行を出て用心の目を配り　牧人
用心のよいのが一人傘をもち　柳宏子
蛸壺の蛸は用心したつもり　生々庵
用心にしてはスピッツ頼りなし　淡舟
用心をするのかひとり離れて居　紫香

兼題「天国」　水谷竹荘選

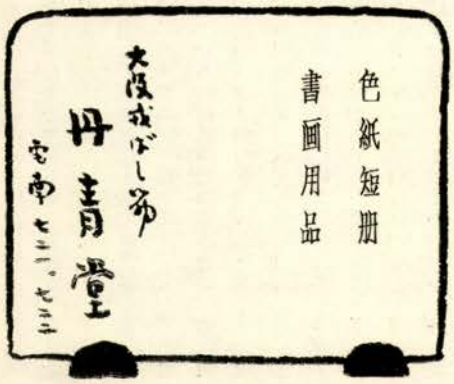
天国を大人醜くして了い　すゝむ
天国で恋を結ぶと書き残し　庸佑
娑婆に未練あって天国ふりむかず　生々庵
天国へ行きますなどと気をもませ　東天紅
天国の平和をロケットおびやかし　阿茶
天国はこんな心地か朝の風呂　井平
有るのか無いのか天国へ行くと言う　庸佑
天国でも地獄でもよし恋の人　悦子
天国の父に合わせと子がせがみ　牧人
天国で結ばれますと死を急ぎ　夢虹
指切りをして天国へ行く心算り　水客
天国へ行くと死ぬ子のいじらしさ　いさむ
天国の途中で心中よみがえり　静馬
極道な伜を天国から案じ　晃
天国で添えるか無惨なこの遺体　繁雄
天国へ来た心地する静養地　蘭
ニコヨンの天国屋台で飲みつぶれ　一鶴
天国へ子供道連れした悲劇　南宗
天国へ行くと書き置きは美しい　紫香
天国へ行く気讃美歌よく揃い　柳志
水入らず金は無くとも天国さ　一栄
天国へ二人で行けると信じきり　清子
天国を願う嘘の手ほんとの手　吸江
天国とあんまり縁のない暮し　生々庵
天国に結び損ねて幇助罪　圭井堂
道ならぬ恋は天国通うすまい　梅里
エス様を信じ天国あこがれる　奈良子
天国で結ぶ恋とも母知らず　摩天郎
これからが天国ですと妻の寝る　圭井堂
天国の絵画も漫画と見るドライ　正一
人類の夢天国へ届きかけ　文秋
天国で晴れて添いますそれっきり　梅里
母さんがいる天国を信じ切り　武助
現実に生きて天国をも信じ　阿茶
天国などあるもんかいとコップ酒　一三夫
原爆の灰が天国迄荒らし　蘭
天国のセットベニヤで出来て居り　鎮海
天国を信じた二人のカルモチン　武助
天国で結婚する気か死に急ぎ　水京
天国の母へ少女はすみれ摘む　夢虹
天国へそのまま行った空の旅　酔升
天国はよいという便まだ聞かず　多久志
天国は我が家であった旅帰り　牧人
天国で結ぶと親をあわてさせ　阿茶
天国はまだ権利金取っとらず　一瓢
天国に結ぶ恋愛すたれゆき　水帆
天国はみな人間に羽根が生え　三司
庶民天国脚を延して寝る布団　生蓋
天国の神秘ロケットかきまわし　一鶴
天国へ科学の夢をうち上げる　旅風
天国を見て来たように牧師様　生々庵
結ばれぬ恋天国で結ぶ気か　南宗
死にそこねたのが天国怖くなり　紫香
天国へ行けるつもりの経をあげ　悦子
天国の嘘へ二人は死を急ぎ　三司
十字架を胸に天国疑わず　牧人
天国で添う約束に親が折れ　竹荘

席題「すれ違い」　木村水堂選

すれ違う途端日傘が邪魔になり　柳志
すれ違い互に彼女連れており　吸江
お互いに気付かぬふりのすれ違い　生々庵
気付かれず借金取りとすれ違い　水帆
こだまとこだま行儀よくすれ違い　古方
すれ違いいつもの癖が出てしまい　南宗
車で飛ばして来たのにすれ違い　いさむ
すれ違う舟も釣れてる顔でなし　圭井堂
すれ違い向かいの傘が戻らない　三司
すれ違いさせず酔ってるのが見つけ　堰子
世に疲れすれ違うことのみ多き　保美
すれ違ってからのマヌケを思い出し　柳志
親子づれ道一杯にすれ違い　牧人
幸運の女神といつもすれ違い　晃
すれ違い女は春を匂わせて　三司
アリバイになった嬉しいすれ違い　生々庵
気をつけて行きなはれやとすれ違い　井平
裏門で親馬鹿同士すれ違い　保美
すれ違う汽車へ手を振る旅の味　清子
後添いをつれて先妻とすれ違い　舟遊
知らぬ顔しとって欲しいすれ違い　一瓢
貧乏人だからだまってすれ違い　十悟
すれ違いした運命を子で結び　正一

席題「代理」　友淵貴山選

黙黙と代理は席を埋めただけ　晃
知事代理拍手も義理の音をたて　旅風
酒癖は代理の方が喜ばれ　生々庵
支店長代理で回る椅子につき　三司
代理店揃わぬ事を先に詫び　悦子
代理役すめば末座にさがされ　満秋
荷が重いらしく代理はまだ言わず　一瓢
チョボひげがあって代理にされてまい　涼秀
代理でもよいとは集り悪い会　武助



焼香へ代理の市長トップ切り　一栄
モー二十才親の代理もつとめさせ　井平
父兄会代理の姉のうら若く　奈良子
税務署へ妻が代理を買って出る　保美
軽くみる代理へ急所ついておく　旅風
父ちゃんの代理酒までよばれる娘　与呂志
思いきり飲めと言われて来た代理　堰子
このところ代理ですませぬ社の不振　東天紅
代理ですとペコペコ頭下げるだけ　淡舟
弔辞よむ代理の方にひげがあり　白柳
代理ではなかった知事へうろたえる　圭井堂
代理だすかいと無責任な事を言い　十悟
チャンスなり代理の権限越えてみる　鎮海
一言が慎重代理で来た社員　武助
長と言う代理にヒンソな顔がくる　十悟
位まけすまいとすれど代理にて　古方
啖払いも変えて代理の席に居り　生々庵
課長代理やたらに判を押したがり　清子
落目なり代理ばかりが顔を見せ　菁風
貰う方もやる方も代理で式が済み　貴山

席題「折詰」　吉田圭井堂選

折詰を差上げとらが戻って来　酔升
折詰へ鯛がのっかる披露宴　一ン十
折詰で機嫌とる手も二度三度　梅里
折詰が又電柱へぶつけられ　与呂志
折詰が八分残して酒がない　十悟
モウロッと折詰だけは提げている　晃
折詰がもう参ったと音を上げる　与呂志
折詰を膝で開いて旅たのし　牧人
折詰へ小鯛はやはり鯛の位置　満秋
不参加が多く折詰二つ呉れ　柳宏子
折詰をとぎれとぎれに食う幹事　柳志
折詰に食べるものなし下戸のグチ　奈良子
折詰を並べて家族慰安会　すゝむ
折詰を子等ジャンケンで片を付け　和楽
きょうだけは社長も折詰食べてはる　一三夫
折詰の追加に気をもむうれしい日　与呂志
ポン引にカモと見られる折詰提げて　十悟
折詰をさっさと空けて下戸無聊　すゝむ
折詰の残骸写す今朝の記事　摩天郎
折詰と一合瓶であしらわれ　南宗
折詰へ衛生局の目が光り　庸佑
御機嫌のよさは底抜け折詰を提げ　柳宏子
社の花見去年と同じ折だった　高志
折詰をもらい当直二日分　永香
お手製の折詰好きな物ばかり　悦子
折詰に巾利かせてる玉子焼　井平
折詰へ名刺入れとく再出馬　徹也
折詰の見本をどくみする幹事　増治郎
行く先はまだきまらない折を提げ　一瓢
折詰が残って幹事飲み直し　三司
折詰が高い敷居をまたがせる　保美
折詰は眺めるだけの子沢山　酔升
折詰を早く食べたい子の花見　〃女
折詰をくさしながらも食べており　永香
折詰へ聞かす訓辞の長い事　摩天郎
一連托生皆折詰にあたったり　一ン十
五分だろと満開だろと折提げて　一瓢
取りかえしつかぬ折詰提げさされ　保美
低気圧折詰などに目もくれず　梅里

（庸佑清記）

雑川　にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

女の子もう男湯を嫌い出し　清人
唐手でも稽古しようかと女の子　晃
女の子笑えばチラと糸切り歯　泰
引き逃げの義憤言ってくとこもなく　すゝむ
砂利こぼしつつひき逃げ走り去り　葉平
ひき逃げへからんで行った髪二本　保美
ひき逃げも映画スターで記事が派手　柳宏子
劇今や中風の忠治に息をのむ　舟遊
応接へ手押し車で来る中風　白柳
中風の目に天井が重く見え　菁風
暖冬にことし中風の出ない父　竜昭
中風の目に御くすりに見える酒　十悟
一飯の義理へ端役の切るタンカ　六竜子
幕切れの拍手をとおくきく端役　旅風
人生の端役雲の動きを見ていたり　満潮
むつかしい顔していても上機嫌　花宵
機嫌よく遊んでいる児泣かして来　庸佑
受験期の子のご機嫌が気にかかり　敏子
一時間目先生はきげんのわるそうな顔　慎太郎
ひと一人まるめくせものよい機嫌　文秋
冗談へついて行ける日行けない日　漣
世直しに俺なら酒の税を引く　生薑
世直しへ東海村の湯がたぎり　柳志
世直しの様にザイラーやって来る　蘭
世直しへ最高裁の非力すぎ　満秋
世直しの一環として樹を植える　千尋
ひき逃げへ思わず二三人走り　梅志

雑川　淀川支部句会（大阪市）

木村太堂選

たそがれて子を呼ぶ母の声尖る　六竜子
声より先に茶碗飛び皿が飛び　東洋男
声出して泣けたらと思う男親　太堂
少年と少女の秘密ちさく持ち　葉光
子とパパの秘密戸棚の摘み食い　敏明
高熱のベッド秘密を隠し切り　三舟
打ち明けた秘密へ友も泣いて居り　尚徳
信じあう瞳が秘密にすると決め　さざすず
新品につつまれて吾子健やかに　灯子
ランドセルさらが嬉しい枕もと　旅風
はずむ胸押さえて試歩の白いクツ　一鶴
新品の車で腹をさぐり合い　若菜
喝采へ息もつがせぬ名演技　すゝむ
グループの喝采うけてのど自慢　礼司
アンコールねだる喝采またつづき　花村
喝采を浴びて花道消えて行き　三十郎
喝采も野次も心得三選し　全信
去って行く背へ喝采続くなり　薫風子
喝采を博しておりる帰日談　香林

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

編集が済んだきょだっを揉むあんま　生薑
喜劇の世界から遠い僕だ　亜鈍
そんな筈ないから喜劇面白し　白柳
あほになりきれて喜劇に名が売れる　十悟
もう春の息吹きへマフラー軽く巻き　山椒坊
マフラーの赤覗かせて教師とか　奈良子
この陽気マフラー見切台にのり　繁雄
マフラーよりタオルが似合う職に生き　一三夫

殺し屋のようなマフラーが風を切り　梅里
弥次馬がくすぶる煙見て帰り　鎮海
煙突の高さ煙に風があり　葉光
けんそんの中に自信をのぞかせる　庸佑
立ち合いの医者も自信のない小首　六竜子
応揚にかまえて自信ないのなり　すゝむ
五六人死なせて診断自信つき　堰子
自信あり過ぎてうっかりかつがれる　文秋
春ももう終りぬ芝を焼くけむり　梅志

川雑　**玉造支部句会**（大阪市）　西出一栄報

腕とコツそこは年期と別のもの　十悟
舞扇流石年期の冴さばき　六竜子
かがり火へ年期を入れた綱さばき　井平
宮大工年期を入れた眸がきれい　千尋
たしなめた口の下から癖を出し　雅美
五十にもなってて爪をかみつづけ　清子
旅慣れず宿の祝儀が気にかかり　喜久堂
帯解けば祝儀袋がバラリ落ち　太路
ちっぽけな部品故障で墜落し　守信
部分品みんな正しく月へ着き　満秋
付くとこに付いて部品の重い役　舟遊
支店へは堅パン一人追加され　正一
本社より東京支店格があり　白柳
大阪の支店の方が強気なり　夢虹
支店より来れば本社のお茶まずし　柳宏子
一方が出せばこちらも出す支店　すゝむ
草深い支店で骨を埋める気　晃
陳列の造花がいつか季を外れ　万楽
小道具の造花無惨に捨てられる　貞旬朗
水盤に妙な造花もまぜて挿し　文秋
そよ風に造花くるっと向を替え　梅志
そっと手を触れて造花を確かめる　清
独り身に造花の埃よく目立ち　薫風子
玉串の手順忘れてちとあわて　愛論
玉串へ敷かれますとは言わなんだ　一栄
叶わねば死ぬ気玉串案へ置き　馥乃

川雑　**ハワイ支部句会**（ハワイ）　築山快夢起報

処女ですと平気で言える年になり　平八郎
処女として嫁がせ母はほっとする　斧平
ああさても処女の誇りと言う仮面　快夢起
書置ははっきり処女を証明し　魔花麗
宿命は哀し尼僧の処女で老い　柳葉
処女の手は機敏身近に寄せつけず　拝山
誇り来し処女で淋しき歳と成り　紅茶
子等巣立ち処女の日したい国を訪い　美潮
そのかみの処女も今では皺がより　恵津子
命がけ処女を守りし日もありき　北海
辻姫も過去は校舎の処女と云う　紋月
処女を守ったニュース世を清め　旋風
嫁き後れ処女会長を再任し　いつ生
持参金処女でないよな噂立ち　須磨子
誇りある処女も情に身を捧げ　吟声
御転婆も処女を守りて嫁に行き　緑星
喰しくも攀る処女峰斗志湧き　内海
処女をだけかれこれと云う得手勝手　エス子

川雑　**京都支部句会**（京都市）　田中鳥雀報

手許から飛ぶ羽ばたき助け呼び　親生
それは天皇のお手許のお金です　ゆきら
明日創る人弁当の音をさせ　薬介
母さんはまたまた明日という一手　烏雀
疲れたる水煙突の影ばかり　紫蘭
放蕩の疲れに朝の湯がぬるし　海三
ひとときのほのおに似たる嫉妬する　幸男
一ト時の腹をごまかすうどんと唐　司郎
童顔の夫へヒスの歯が立たず　和三郎
またしても童顔の友にそむかれる　正夫

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）　野村味平選

短気とは見えぬ短気の糸を垂れ　光郎
老人の短気を老妻よくさばき　酔羊
気短かも芸者に軽くあしらわれ　素百々
気短かの声ご近所へつつぬける　美代
言い訳をしたで気短かまた怒り　一路
握りすし浮気な客へ効くわさび　金仏
浮気とは知らず純情な娘の涙　佐和子
病みついてパパの浮気をあきらめる　味平

川雑　**広島支部句会**（広島県）　平田越舟報

伝言板今日の日づけのものはなし　吐川
鳶の子は鷹にはなれず通信簿　昌幸
請求をするまで出さぬ通信簿　方川
自転車を約束させた通信簿　上利
通信簿どうであろうと祖母やさし　二三夫
矢印を無視した道の喰しすぎ　越舟
伝言板思いを託すも六時間　日進
矢印が谷に落ちてる山の道　うしを

川雑　**鳥取支部句会**（鳥取市）　河村日満選

大厄をドライ其のまま通り抜け　天保銭
ゆっくりと歩くも全快した当座　白郷子
器用さを買われ日曜暇がなし　天邪鬼
厄除けに詣る車が転落し　由多可
春日和牛もゆっくり草をかみ　秀和
厄年を笑いとばして春の酒　星影
元気なうちは厄年気にかけず　多可志
本職と間違えられた鉋くず　三歩
四十二の厄これからだこれからだ　茗人
これ君の作かと器用さだけ認め　耕民
器用さを課長夫人に頼まれる　湖山
不器用の僕へ味方をするも妻　日満

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）　直原七面山選

仲人口罪にならない嘘も云い　あきら
行商の嘘と知りつつ買わされる　信治
用意した嘘へ先手を打つ女房　竜児
デイトの娘親を病気にして休み　義風
医者の嘘信じたままで息をひき　喜楽
ソロバンを弾いて本当らしい嘘　悶甫
容赦なくマダムはおしゃれ代せびり　順湖
嘘一つ云わぬ夫でもの足らず　三休
軽患へナースのおしゃれが気をもませ　文舟
つつましいおしゃれハンカチ二枚持ち　竜児
ウインドに一寸うつしてみるおしゃれ　ちとせ
内職が妻におしゃれを忘れさせ　幸堂
物音がネズミであってほっとさせ　仙人坊
ネズミ算どおりに行かぬマネービル　登仙坊
積む雪をちょっと覗いたどぶネズミ　徳人
猫の恋まねればネズミしこを踏み　たつよ
駅弁が胸につかえた逃避行　賤女
悩みごとあって弁当食べ残し　七面山

川雑　**浜寺支部句会**（堺市）

川村好郎報

発奮の動機水増しして語り　東天紅
発奮をさす気で死んだわけでなし　圭水
蹉跌した父へ角帽捨てて立ち　圭井堂
発奮を機会に名前も変えてみる　吸江
一月も末発奮もいつか消え　好郎
発奮を誓った木の冷たさよ　徹也
餅を背に舞うお師匠の白い足袋　摩天郎
かび取るは祖母の役なり餅を焼く　白柳
餅さげて二三日世話になるつもり　昌男
五十から発奮したが肩が凝り　帆舟
発奮を先立つものにおさえられ　生々庵
干筵の型もなつかし餅が着き　梅里
結納へあきらめきれる恋なるか　宏子
結納をおさめてからの日の長さ　青蛙
やっとこさ箱だけ買える支度金　裕邦
結納の額も二人で決めてくる　保美
ほろ酔いの又けったいなものを買い　古方
同じ歌ばかりでほろ酔いうれしそう　雄声
ほろ酔いの足へ合して折も揺れ　武助
吹えられてほろ酔い投げる妻揚枝　貴山
熱弁のわりにわからぬ話なり　舟遊
ひがんでる目に寒々と居る後妻　雪山
似たように書けと代筆無理をいい　南宗
代筆も頼まず母真心をカナで書き　狂二

川雑　**備前支部句会**（岡山県）

三村柳風子報

親友の靴を提げてる三次会　正洲
親友は敬語不要の仲となり　良蔵
呆れてるポーズをカメラ見逃がさず　一声
街頭で明治の父はよく呆れ　秋月
隅っこで聞く腕組へ油断せず　三大
御不浄の隅へも季節の花を入れ　水仙
庭の隅忘れ果ててる芽がのぞき　久米雄
日曜の新聞隅から隅へ読み　柳風子
真直に帰れと今日も見送られ　幸仙
癖のある松を庭師はほめて去に　あやめ
お師匠の癖も覚えて三味が弾け　伊久野
七癖があっても仲の良い夫婦　誠司
三カ日経てばもう着る菜葉服　万女
三カ日暮の疲れを寝て直し　芳月
松の内妻も御機嫌よく笑い　草二
マラソンのビリへも拍手しばし鳴り　東岸
どん尻に来て又押した横車　浄美
どん尻もニコニコしてる幼稚園　竜泉

川雑　**松江支部句会**（松江市）

梶谷冬生報

新安保日本を黒くつぶす気か　孤呂二
黒白をはっきりさせて狭く生き　与根一
黒んぼ大会健康な陽がはじき　まさ子
黒白の期待を高裁差し戻し　畔子
黒いとは云えず健康そうとほめ　鵬人
真黒なカーテンの頃子は知らず　好江
同情票一番乗りで当選し　とし子
同情をこわいと思う未亡人　三雷波
不足げな子の顔右に持ち変える　章道
左利きらしい裸の肩の肉　妖人
路地裏に昔の浮名落ちぶれる　祥月
皇室の浮名流れる世となりぬ　ふる児
飽いた頃飽かれた頃に浮名立ち　天痴人

川雑　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼選

終電のあとに夜泣きの湯気が立ち　可住
味噌汁の湯気に平和の朝迎え　初穂
待つ宵は湯気を見詰めるほかになし　美千代
虎造が湯気の中から聞えて来　万世
突ッ立った湯気に不動を思わせる　無鬼
質実剛健の軸を泣かせるサクランボー　ひか平
中学へしわ寄せが来たベビーブーム　多津男
ベビーブームこんな筈とも知らず生み　みのる
スキーブームザイラ如きにおどらされ　澄代
立ちこめる湯気へ混浴はばからず　凡志
官費旅行満場異議なく決議し　枝葉
ドタン場になって決議にひまがいり　まさ子
子等の数たのんで禁酒決議され　左文字

川雑　**西宮支部句会**（西宮市）

菱田満秋報

雲切れてあわててポーズとりなおし　夢虹
その中に野心家がいて纏まらず　一杯
野心ある男のなんとソツのなさ　敬太
少年の頃の写真をほめられる　絃月
少年工体を耳にして動き　舟遊
少年の胸に懐惰が棲みはじめ　薫風子
子の野心親の野心で見合いをし　うしほ
忘却という一念に雲を見る　猛彦
頼まれたついでの方にひまがいり　花美
批判する方にもあった同じ過去　鮎子
恋人の近くについでの用が出来　満秋
自己批判隅へ小さく席を取り　牧人
髭剃ったついでに襟をそらされる　千尋
美少年女の役がうってつけ　三舟
雲が画いてあるので空かなとおもい　蝶花
今日の雲いい人の顔に見え　民子
中傾表抱いて野心が捨てきれず　蘇堂
おとなより恐いのがいる少年院　静馬
上京のついでに二重橋を越え　一ン十
野天風呂しゃあしゃあ雲を見てこまる　泰
野心家の鼻はワサビの汗をかき　三司
手を握るだけで野心はおさえとき　多久志

雑川 米子支部句会（米子市）

小西雄々報

車道まで長靴履いた角かくし　蛙眠子
長靴の底で水虫春を知り　新雪
迷信と知りつつ祈る親心　節枝
左ききしのぶ逸話も一周忌　君枝
おっかない鎌のさばきも左ききさとし
気まぐれの恋も噂が生んでゆき　吾柳
気まぐれに読んだ本から得たヒント　鶴丸
つき合いの汁粉にのびた左ききき　幸子
左ききあっぱれ槍を飲み取って　福女
無器用は無器用左ききながら　仙笑
叱られて眠った涙詫びて拭き　精耕
親よりは出世させたく塾へ遣り　一保
左ききだけが残った三次会　一枕
長靴を履きデモ隊の指揮をとり　雄々

雑川 小松支部句会（小松市）

伊藤茶仏報

朝の記事すぐ匿名の金一封　千太郎
同情へ女心の甘えて来　松水
落第の子をあたたかい瞳で囲み　光威智
叱られている兄より妹が先に泣き　芳子
お役所の机無情に突っぱねる　城南
黒板に労資の妥協まだならず　生風
黒板を見る目も違う反抗期　多恵子
元日の黒板希望のある黒さ　たつ路
お得意の喉を聞かせる酌に立ち　みなり葉
肩すかし政治家それを得意がり　義風
円満に事を運ぶに手間を入れ　味平
円満な妥決で何かものたらず　若浪
その癖を女房がまねる円満さ　雅城
更けてゆく街へふらふら梯子酒　美和子
つき合いはつらいといそいそ家を出る　きみ子
交際費まで税金にみつもられ　茶の香
お附合い程度の寄附を断られ　茶仏

杏林川柳会（大阪市）

阿茶

団地の子坊ちゃん刈でこまっちゃくれ
団地族文化施設を鼻にかけ　一哲
ここからがアメリカ村と云う団地　珊枝郎
ぞろぞろぞろ団地の朝の出勤時　小石
此団地何票有ると政党屋　珊枝郎
雨あがり団地の窓の傘の花　路文
御用聞き団地ばかりは苦手なり　一伸
向き合うた窓に団地の見栄があり　生々庵
家元はこうだと議論沸騰し　石南
京の春だらりの帯の大写し　小石
家元の紐が作曲引き受ける　阿茶
家元にならず師匠へ義理を立て　同
舞扇すっくと家元らしく立ち　生々庵

大阪通信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

御臨終ですと注封器仕舞いかけ　愛論
注射器へ看護見舞がしんとする　没食子
注射ぎらいで先生も気が疲れ　宏子
紅盤の街に赤旗振る無粋　方正
色街の蔭に刑事の目が光り　幸男
何時来ても色街金のいるところ　竹荘
色街にそだち職業手につかず　蕗児
咳き止めの飴を食べよと孫がくれ　けい女
くさめ咳あくび赤ちゃんいそがしい　風船堂
咳一つ出してもきらう社長室　康彦
酌一つ打算忘れずナンバーワン　春雄
外に良く内では勘定高くいる　ハナ子
主義主張みな算盤をはじいてる　草右
勝負師はさくらも使い打算的　比呂志
人生を打算で生きて悔いとせず　春巣

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

此の辺に支線が欲しい梅見頃　武助
待ち合せ時間に慣れた支線客　昭月
ゆっくりと保線夫支線の草を引き　貴山
心付けの事も新婚聞いて立ち　宏子
タブレット待ってる支線の閑な汽車　句念坊
素朴さがにじみ出ている支線客　昭月
支線です走るお客を待ってくれ　圭水
流行歌支線の方が巾きかせ　みなっき
駅前は支線となってさびれてき　つとむ
時代には勝てず支線へ来た車両　貴山
支線勤務又松茸をことづかり　路郎

帝化川柳会（大阪市）

谷沢好祐報

新妻が出す座蒲団へ友も照れ　柳影
座蒲団を出されて子供先ず坐り　真砂老
座蒲団の赤ちゃんを負い莫蓙の上　義雄
座蒲団を干して婚礼恙なく　晴暉
腹立てた若さが辞表叩きつけ　風柳
ブルースを唄えば重役にもある若さ　蒼芒
もて余す若さ白バイ手こずらせ　雅堂
改悛の月を獄屋で見る若さ　一平
まだ若いつもりテニスで息が切れ　好祐
未亡人仏間を閉めて向き直り　九紫
再婚の話をミシン笑うだけ　京一楼

たけるべ川柳会（岡山県）

野々口美舟報

ほろよいが隣の肩かる終列車　秀波
傷者の娘が母親を慰める　木兎
近所への土産は妻に委せとき　山彦子
経験を信じ切ってる手術台　喜楽
お隣のラジオを聞いている孤独　牛骨
世渡りの経験嫁ぐ子に聞かせ　敏子
春霞あの娘が泣いた目の記憶　素古平
お隣の時計で夜業の針を止め　美舟

酌よし　千日前大劇裏　TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下　TEL(77)〇一四七
梅里の店　大萬

★大万川柳（第百十一回）を募る
兼題「かけ持ち」路郎先生選
締切・五月十五日　五句以内
発表・五月廿一日（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ一〇　大万川柳会宛

ボクの水曜

路郎

ボクのからだについていろいろ心配をかけてすまない。ボクも一昨年の秋にはどうかと思ったが、みんなの力で引戻してもらい、士俵ぎわで死闘を続けて来た。雑誌や新聞柳壇などを持っていては、なかなか静養なんて出来っこがない。ところがどうにかこうにか一九六〇年へ持ち越して来たのでサアこれからボチボチやろうと思っている矢先、二月廿二日、大手前会館での安保問題の懇談会へ出席してから下痢状態で臥床、三月四月は風邪で臥床、諸種の会も本社の句会などへも顔が出せぬところまでになった。

ところが、この間に、雀郎君や伍健君等があいついで亡くなってボクの心が一層淋びしいものにした。ここ二三年間に柳壇の大物がつぎつぎと亡くなったので、ここらが柳壇の曲り角ではないかと思う。

ボクも、もうそろそろ、腰をあげてもいい時分だとは思っていたが、斯うバタバタ亡くなられては、そうアッサリ、左様ならと云うわけにいかぬことになった。それにボクとして整理しておきたいこともあるので、死闘の範囲を多少ゆるめて、も少し生き伸びることを考えた。

今までボクには祝祭日も日曜日もなかった。原稿を書くためには昼夜の別もなかったが、四月から水曜日を川柳の仕事から一切離れることにした。従って私でなければならないことなら、会合であろうがなんであろうが日を変えてもらいたい。そのためには電話へも出ないからその点おゆるしが願いたい。用があったら社の者へメモするように申付けて下さい。月に四回か五回の休養をとることに踏切ったボクの断に協力されたい。

新刊紹介

▼山村祐著詩集「大礼服」が東京都千代田区神保町一ノ三昭森社から発行された。敗戦後四、五年間の諷刺的な作品で、川柳とも通じるものがあり、川柳家の一読をお奨めする。A6横綴版三十七頁定価三百円

▼萩原時夫（山路閑古）著随筆集「羅馬の休日」は昭和三十五年三月十五日東京都千代田区西神田二刀江書院から発刊された。B6版、二百六十四頁定価二百八十円

▼花月亭九里丸編「寄席楽屋事典」が四月八日大阪市阿倍野区長池町二三渡辺力蔵氏方から発行された。著者が大阪での高座生活をもとに纏められている。

・ペンの散歩・

▼目に青葉という季節がきた。色をあらわすなら目に緑葉のほうが適切だが、五音に対し六音でしかも「りょくよう」より「あおば」のほうが舌をかまずに言えるから目に青葉というのだろう。しかし実感からは青天の青より、緑蔭の緑という字のほうがピッタリくるようである。青空の青の色と、緑樹の緑と同色とはちょっとおかしい、やはりこの季節は青葉より緑葉とするほうがいいのではないか。まあそんな色眼鏡は外ずして、この生き生きとした新緑の大気にとけこむことだ。

▼路郎主幹と休日。これは正に青天のへきれきだ。しかしご静養にはこれよりテがないのである。何とかしてこれを実行おさせしたいものとおもう。

「水曜日は先生お留守」

訪問はもとより、電話もご遠慮するようにすることが、われわれ門下の、一つのご協力だとおもっている。

▼本号も「名句と難句」がオリた（休載）が、ハシラ（好読物）になるページがウンとあったから原稿もただきたい。

▼堀口塊人氏の「ある座談会にて」は、次号へ温存しておけば、原稿の苦労がへるのだが、いいものはやはり早くお目にかけたい。

▼そのほか、高鷲亜鈍・東野大八・冨士野鞍馬・北川春巣・清水白柳諸氏の健筆陣には重量感があり、本号もまたおほめいただけることと思う。直原七面山氏の郷土岡山を憂う熱血の至情には心打たれるものがある

▼六・七・八と、サテその次ぎは四百号記念の九月号だ。さあ頑張ろうぜを合言葉に編集部はハリキッている。

（一三夫）

★5月の会　川雑支部

★淀川句会・2日（月）六時、題種・定食・なまけぐせ、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局★倉敷句会・7日（土）六時、題、五月晴・恋・外出着・バスガイド・人物、所、水島弥生町四ノ三一椙原一善居★米子句会・8日（日）一時、題、時事吟・あそぶ・野心、所、米子市公会堂和室★明和研究句会・8日（日）一時、題、恋文・指・皿、所、西宮市鳴尾町新明和興業KK本社和室★宇部句会・8日（日）一時、題、マイク・毒消し・やぶへび・でこぼこ、所、沖ノ山扇町区民事務所★玉造句会・10日（火）七時、題、トラ・合槌・はったり、所、市電玉造南百米大阪信用金庫★阿倍野句会・18日（水）六時、題、意外・チューリップ・風呂敷、所、旭町二丁目金塚会館★西宮句会・20日（金）六時、題、緑・シャツ・血、所、阪神電車西宮駅北出口スグ西宮労働会館★南海電鉄句会・26日（木）六時半、題、不通・あせり・ぬか喜び、所、難波高架下・親和クラブ★弓削句会・月末〆切、題、隣・牛・常識・手紙、投句先、岡山県久米郡久米南町下弓削四五四、直原七面山居★篠山句会・題、安心・葉・旗、所、多紀福祉事務所別館★備前句会・題、見本・年季後手・長尻・涙、所、草二居★京都句会・16日（月）夕、題、絶景・頬骨・猿、所、四条縄手仲源寺★にしなり句会・22日（日）六時、題、明暗・好き・救急車・所、玉出新町通一ノ一一（南和園）後藤梅志居（薫）

麻生路郎著

新川柳鑑賞

好評噴々

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送料三二円
B6版
二五〇余頁

発行所 **川柳雑誌社**
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話 大阪 ㊥六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

5月号発売中　130円（〒12円）

特集
ガム界の前哨戦始まる
粉末ジュースへの苦言
必須アミノ酸の将来性

◇

シーザーガムの利用価値
液体香辛料の特徴
ドライアイスの新用途

◇海外情報　◇特許告知板
（商標ニュース・意匠ニュース欄新設）

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・香料等

大阪市北区木幡町5/5/4 電(34)5231
食品と科学社
振替 大阪6702番

ビールは アサヒ ゴールド

空一陸一海　主催 朝日新聞社

のりものフェア

3月20日 ➡ 5月31日

三里に灸すえて 旅をしたのはついとの間、しかしもう月へも近い。"のりもの"は急速な進歩をとげていく……過去から未来につながる"のりもの"の総動員がこれだ。

●野外大パノラマ　●のりもの歴史館
●屋内パノラマ　●つつじ人形

オ1会場 みさき公園　オ2会場 淡輪遊園

割引入場券つき乗車券…360円

南海電車

printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　三十五年 第五号

定価 七〇円（送料四円）

半ヵ年 四四四円
一ヵ年 八四〇円

（禁転載）

昭和三十五年四月廿五日印刷
昭和三十五年五月一日発行

大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人 麻生幸二郎

発行所 **川柳雑誌社**
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話 大阪 ㊥六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

募集

課題吟募集

消息（十句以内）尼　緑之助選
渡り世（十句以内）真鍋一瓢選
婚期（十句以内）高橋操子選

（六月十五日締切）

禁酒（十句以内）大鶴喜由選
祭ハンカチ（十句以内）小川恒明選
（十句以内）田垣方大選

（六月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選

（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。

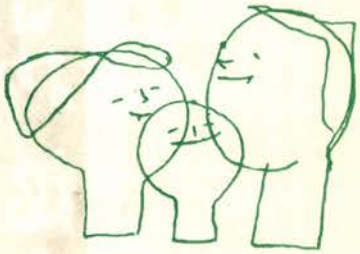
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。

▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和三十五年五月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　鶴寺宗二郎　発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地　電話大阪㊥六〇八一
郵替口座大阪七五〇五番
定価七十円（送料四円）

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位綜合ビタミン・ミネラル剤
ポポン-S
20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円
シオノギ
塩野義製薬株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理
蓮菜
大阪なんば・TEL ㊥551－2

麻生路郎先生著
川柳とは何か　送価 二五〇円 三二〇円
—川柳の作り方と味い方—
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。
取次所　川柳雑誌社
至文堂
東京都新宿区払方町27　振替東京29507

皮ふ病の中で一ばん多い
湿疹
くさ・ただれ・あせも
★カユミをすぐとり、掻くのを忘れるほどです。
★慢性・頑固症にもよく効きます
★カブれず、ベトつかず、クリーム状で爽快です
ゼム
山之内
東京・大阪　山之内製薬株式会社　福岡・札幌